
ゲッター? 蓬莱幻想

廣瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲッター？ 蓬萊幻想

【Nコード】

N5455Y

【作者名】

廣瀬

【あらすじ】

時空軸の違う東京への集団遭難と、遺恨を残した友人たちの死から二年。平安ゲッターで高等部一年の春を迎えたリヒト、ミサビ、テッセン、そして、彼らと和解したミュー。リヒトは家族と再会の日を待ちながら、転生の理由となった京都のできごとに悩んでいた。いっぽうテッセンは、留学した蓬萊ゲッターで、かつて自分が否定した“魔法”を現実にしようとする研究者と出会う。ゲッターの存在意義が問われる一年の幕開け。魔界へと変貌をとげはじめる世界で、隔離自治区と現世と天使たちの関係の、新たな局面は。

1 春雷

「ひとりの科学者の夢が、百万の無辜の民を殺す。ノーベルやライト兄弟、アインシュタインの轍を見よ。彼らの技術がもたらした、おそるべき結果を見よ。そこかしこ、無数に積み重ねられた民衆の死体——これこそが、彼らの夢の暗部が抱えた汚点である。これからのちの科学者たちよ、お前たちがもしも世にもあえかなる夢を見たとして、重々承知しておくことだ。もう一度、同じ道を通るわけにはいかない。人外よりもたらされた力を研究する以上、その危険の上に立つことを自覚しなければ。私たちの野放図な夢こそが、まさにこれから世界を滅ぼすのだから」

——L. S. V E N E S T R O M “魔的粒子研究誌”より

*

春が出会いと別れの季節である、という考えは、ここ、蓬萊市にはない。しかし、彼にとって、今年の春こそがまさにそれだった。いや、出会いと別れ、というよりも、それは別れでしかなく、別れというには、それはあまりに納得のいかないことであつた。

「××××××××！ ××××××××！ ××××××××！ ××××××××！」

テーブルを叩いて罵詈雑言を吐き散らかす。それを聞いた周囲のひとびとが、あわてて慰めの言葉をかける。ここで彼が手にしているのに相応しいのは、ワイングラスかビールのジョッキか、というところである。背景が、薄汚れたパブならなおいっそう絵になっただろう。

しかし、残念ながら、そこは真昼間のカフェであった。周囲にいたのも、友人ではなく、迷惑そうに顔をしかめた店員たちだった。

「大丈夫かい」「ほどほどにしてくれよ」――彼らは、真昼間から、研究所の職員がここでくだをまいていることを不思議に思ったが、スチュアートのことを、まあまあよく知っているのです、いつもの気晴らしの一種だろうと考えた。最後は「お静かにねえ」と、豊満なバストの女性店員に、軽く注意をさせるだけでほうっておくことにする。ほうっておかれたスチュアートは、さきほどよりいくぶん音量をおさえて、再び、上司をのしる。

「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……！」

もうすこしだったのに。

彼の頭をずっと駆け巡っているのは、その一文だった。

もうすこしだったのに。あとすこしで世界を変えられたのに。あと少しで。

いったい、何が悪かったのだろうか？

コーヒーで酔うわけではないが、体内をかけめぐる激情が、それに似た効果をもたらして、すれに彼はぐでんぐでんである。酩酊のいきおいで頭をテーブルにぶつけながら、いつ終わるともない呪詛を吐き出す。

どのくらいたったころだろうか。春風が身にしみるほど寒くなってきたとき、ようやく、彼のもとへよく知った人物がやってきた。

「ハイ、老師。ゼンマラ（どうしたの）ー？」

元、後輩の女性である。今は、大学で事務をしている。仕事帰り、という格好の彼女――小麗は、彼の隣に腰掛けて、プーアル茶を注文すると、かわいらしく首をかしげた。彼女は、かつて米国へ亡命したチベット民族の子孫である。目の前の若い男が、かつて先祖を虐待した漢民族の末裔であると知っていたが、なんとなく憎めなかった。それは、この男が、過去を気にせず未来だけをみる科学者であったためかもしれないし、今見せるような、直情径行の様子が、

ひとを心配にさせないではおかないから、かもしれない。

それはそれとして、スチュアートはそれを聞くと、理解者を得たとばかりに、がばりと顔を起こして手をふりまわした。

「聞いてくれよ！」

しかし、その顔で、事務にしておくにはもったいない、と言われる小麗はすべてを悟ったらしかった。

「ああ——ついに潰されたの」

はつきりと他人から聞いて、スチュアートはまたテーブルにつくぶした。小麗はあわてて鞆をさぐり、

「老師。しっかりして。大丈夫よ。ねえ——あ、そうだ、クッキー食べる？ お好きでしょ、チョコチップのクッキー。私、昨日焼いたの」

「おお……ジーザス……」

彼の所属する魔的研究所蓬莱支部は、他の支部と同様、ソジ粒子発見にともなって続々と見つかった未知の粒子——総称して、それらを魔的物质と呼んだ——の、研究をしている。関わっただけで命を落としてしまうため、人間には扱えない。羽化転生した彼らだけが研究できる、いわば独占業務だった。研究の過程で副次的に得られる技術の応用が、それぞれのゲッターがあげる収益のうち、かなりの部分を占めたので、魔的研究所の各支部はいわば、それぞれのゲッターにおけるフラッグシップであった。

さて、彼らの在住するこの蓬莱市は、名前だけ見ると、アジア圏に存在するゲッターのように思われる。しかし、そうではない。蓬莱ゲッターは、米国在住のアジア系転生者のために設立された、米国にあるゲッターであった。特に、他国へ移住しても頑として自国の文化を保持し続けた、中華街、朝鮮街出身の住民が多い。そこにわずかに日本やシンガポール、マレーシアなど東南アジア人種が、欧州アフリカ圏からも合流する。もつとも歴史の新しいゲッターとしても知られている。

上海とか、香港とか、広州とかマカオとかの地名がつけられた区

に、五千人程度が暮らしていた。所在地米国の属する大西洋連合の、アトランティック・ユニオン第六のゲットーとして数えられたりもする。

チャイニーズ・スピリッツとアメリカン・ドリームがキメラのごとく、一つの町の中に特徴をみせる。今、彼らがいるのはカフェであるが、その両翼には茶館もくっついて、カフェ・ラテやバドワイザーや烏龍茶や茉莉花茶、もうもうと湯気をたてる蒸籠の点心などがごっちゃになって売られていた。

「それで、今度はどこの部署に行くの」

「簡単に言わなくてくれ。私は——私は、あきらめきれないんだ」

「でも、予算がもうもらえないでショ。それか、老師。老師なら、よそのゲットーの支部に移ったらいいじゃない。ヒクテアマタでしよう」

「駄目なんだ。くそ。所長が——所長さえそのままなら」

去年、蓬萊支部の所長に、新しく、スチュアート・ヒルガーという男が就任した。元、大手新聞社の会長を務めていた人物である。彼は、無駄な経費と人員を削減するために、金にならない研究からとっとと撤退することをはじめ、この春、ついに、その魔の手がスチュアート（いまいましいことに、彼は、所長とファーストネームが同じである）の部署にも及んだ。いわく、経費ばかりかさんで結果が出ていないから。実用化には程遠いから——たしかに、スチュアートの部署は金も人もよく食った。本当なら真っ先にきられていてもおかしくなかった、ともっぱらの、所内の噂である。しかし、部外者であっても彼らを必死にかばい、まもうとした人間が多かった理由は、彼の部署が、この先の世界を変えるかもしれない、最先端の技術を研究していたからでもある。研究者にとって、世界初とか、業界初、とかいうのは、命にもまさる名誉だった。ロマンだった。夢だった。結果が出ていない、と言われればそれまでだが、その結果まで、スチュアートのみるところ、あと一步にも迫ろうとしていたところだったのである。もう少し待ってくれよと彼は言いたかった。だが、その声が届くことは無かった。

かくして、スチュアートは、コーヒーカップを手に酔っ払うのである。

「自費で——自費でできないことはない——」

「でも、次の新しい部署のトップになるんでしょ」

「私のやりたい研究ではないんだよ。惜しいところだけだね」

「でも、そっちのほうがお金になるんでしょ」

「最初からお金目当てで研究する科学者なぞ、科学者ではない。そんなものいるか！」

「ふうん。で——あと、何が足りなかったの？　もうちょっとだっただ、って」

「そりゃ——最後の実験に協力してくれる、人、だよ。動物実験は済んでいたからね。そうだなあ——気力体力ともに充実して口が堅く、うちのデータを持ってよそに逃げたりしない、誠実な——そうだな、軍人ならいい。一番いい。蓬萊ゲッターの軍人なら。そう思っ、て、人選しようとしてたんだよ。その矢先のことだった——あのヒルガー、鼻持ちならないやつが」

「でも、申請書があるわ。今となっちゃ、軍が許可してくれないと思う」

「連合ゲッターは？」

「もっと無理」

「蓬萊の学生」

「さらに無理」

小麗は、すましてプーアール茶のマグカップに口をつけ、スチュアートはがっくりと肩を落として、クッキーをほおばる。

「近い研究やってます、ってことで、こいつをデコイにするか——チーム自体が身売りされなかったただけまだ良かった。しかし、そうすると月例発表をどうするか——」

もそもそと呟くスチュアートを、小麗は同情の目で見た。

ふと、彼女の脳裏に、奇術めいた策が浮かぶ。

「ねえ老師。なら、こんなのは？　要は、最後の実験に協力してく

れる人がいればいいわけよね。ちょっと危ないかもしれないけど」
「ん？」

「他国からの留学生はどうかなくて。お金でなんとかなるかもよ」
「留学生——」

「大学で、誰か適当なのが見つかるかもしれないわよ。いや、大学じゃ、自分の租界の思想にどっぷりつきすぎてるかしらね。高等部——まで範囲を広げるか——」

「あんまり頭がよくないほうが助かるね」

ぼんやりと、考え込みながらそう言ったスチュアートだったが、だんだん、小麗の言葉が脳裏に染み入るにつれて、希望がわいてきた。

——ありかもしれない。

彼は、すばやく計算をめぐらす。

今、彼はピンチにあった。元、同僚のなかには、彼らがこれまで蓄積してきたデータを持って、よその、同じ研究をしているところへ移籍する、というものもある。もしもそのデータがわたったら、彼らがどこまで事を成していたか、どういったアプローチをしていたか、ほかの支部のライバルたちに、たちどころに分かってしまうに違いない。

ほんの一秒論文を出すのが遅れただけで、その功績が他人のものとなる、というシビアな事実は、20世紀科学者のあいだに浸透して以来の常識だ。今、スチュアートは、誇りをかけてそこに立ち向かおうとしていた。

彼の故郷、中国——いわずとした古代中国は、羅針盤、紙、印刷術、火薬を生み出した、大いなる発明の国であった。それが、二千年のちには、他国の眉を曇らせる、模造品の最大産出国となっていた。そこから名誉を挽回するのに二百年、自国での研究体制を確立するのに五十年。いまや、中国は、アメリカ、インド、日本と肩を並べる科学の国である。生物学の範囲で、今回はイギリスとも並ぶかもしれない。

変化した、元、中国人の大きな野望は、今、散ったかに見えた翼を再び得ようとしていた。

「ようし、やってみるか。となれば、用意は周到にこしたことはない。そうだ……私が、最初に世に出す——見ていてくれ、小麗！

私が、世界で最初の魔法使いだ。私が、科学を魔法に変える！ イツアチャイニーズスピリット！」

「老師、がんばれえ」

たったひとりの拍手と協力のために、世界がコペルニクスの転回を迎える、ということも、やはり、奇跡の一端である。技術が飛躍するとき、たまには、こつこつとした実証の積み重ねではなく、まったくの偶然からなる、ということもあるのだ。曼荼羅のように複雑な人の動きと時間の流れが生み出す魔法が始まろうとしていた。

そして、そこにまきこまれてゆく留学生はというと、今——

春、平安市は、満開の花に埋もれていた。平安市、というこの場所、もしも人格があったなら、あまりにも華やかに装った自分の姿にほほを染めるだろう。雪解けして久しいこの町でも、なんといっても、春の訪れをはっきりと感じさせるのは、やはり、花卉のひとつひとつがピンクの水晶に色づいて咲き誇る、桜であった。そして、それが終われば、新芽の芽吹く卯月の終わりから、すがすがしい皐月の晴天に、繁栄の緑が透かし模様をつくる。緑陰はまだ熱を持たず、静かな冷たい風がさわやかに駆け抜ける。

その、平安市にある平安学園高等部。近代的なづくりの建物のピロティには、ついさっき、試験を終えたばかりの学生たちが、ぞくぞくと現れて、立ち話をしていた。そのなかに、三人の男子学生と女子学生がいて、なにやら熱心に話し込んでいる。一人は、とびぬけて背の高い、体格のいい、ワイルドを絵に描いたような人物。二人目は、やや茶色がかった髪に秀麗な、優しげな顔立ちの少年。三人目は、身長も体格も、一人目と二人目の中間に値する、どこことなくエキゾチックな雰囲気のある少年である。香るような異国情緒以外に特筆すべき点はないが、闊達な様子が目をひいた。そして、彼のそばに静かに寄りそう少女はというと、あたるをさいわいなぎ倒す、どこことなく恐ろしくなるような、人間離れした銀髪と美貌の持ち主だった。

「ぜんぜんわからなかったな」

べつに後悔するふうでもなく、乾いた声で呟いたのは、ワイルドを絵に描いたような——テッセンである。銀モールのついた学ランの襟をはずして、やれやれというように肩をまわした。ずいぶん伸

びた髪を、雑に後ろでひとまとめにしている。

「俺も、ぜんぜんわからなかった」

情けない調子で言ったのは、エキゾチックでいつも元気——リヒトである。幼さを抜けかかった青年の顔つきで、同じく、襟をはずす。

「身体髪膚これを父母に受く、あえて毀傷せざるは孝のはじめなり？　だったか。これを平安人の立場から反論せよ——ミサビ、なんて回答した？」

「“一切衆生^{ひと}齊しく父母の恩のごとく深しと置いて、なす所の善根を法界にめぐらす。別して今生一世の父母に限らず”」

「なにそれ、どこからの引用？　どういう意味さ」

「正法眼藏随聞記——すべての現象を、両親から受ける愛情のように深いと思って、行動を良くしなさい。孝恩とは、特に、生みの父や母に対してたてるものとは限らない。」と」

「あ、私も」

ミサビの答えに、ミューもうなずく。

「課題図書だったね。一応、覚えておいたんだけど」

「これだから優等生は」

ねえ、とりヒトとテッセンは顔を見合わせた。テッセンは「けつ」と吐き捨てると、

「こちらら演習帰りだからな。ぐちゃぐちゃ引用だの暗記だのは性にあわねえや」

不勉強のいいわけをした。

「でも、書くことは書いたんでしょう。なんて反論したの？」

リヒトが尋ねると、興味深そうに、ミサビも目をしばたかせる。

「俺は毀傷してないから関係ねえって」

あごをそらし、にやりと、自分の胸を親指でさす。

「あ、そう」

たしかに、彼は、生まれながらの平安人だ——テッセンは、四月

の半ばから二週間にわたって、類？、と呼ばれる区分の生徒の必修授業に参加していた。亜空間にとんで、仮想敵を倒す実践授業である。この類の授業が、特に、前衛と呼ばれる進路を希望するものは激増する。授業を終えてさらにひきしまった横顔を見ながら、いいなあ、と、正當な言い訳を持たないリヒトはため息をつく。彼は類？——医療、農業、芸術系に属する生徒である。後衛、後方支援組で、主に補給について学んでいる。同じく、類？に属するミューが「大丈夫だって」と慰めるように肩を叩いた。

「補修になっても、私がいるからさ。ね——リヒト」
「ああ。頼むよギン」

「まかせて」

ちっ、と、あまり聞かない舌打ちがしたほうに二人が顔を向けると、ミサビはにこにこしている。

「僕も教えてあげるからさ。ね、テッセン」

「あー、うるさいうるさい」

テッセンは、しつこいハエをはらうように肩に置かれた手を払った。彼の眉間には、深いしわがいまだに刻まれている。ミサビは、それ以上深くは追求しなかった。

ふと、誰の口からも言葉が失われる瞬間。

四人が一度に集まるのは久しぶりだった——それこそ、共通テストでもなければ、あまりに授業の内容が違うので、話も合わない。

あの事故から、一年と半年がたつ。

「このあと、どうする」

「ミューは？ このあと、用事があるって言ってだろう」

「女子寮で、寮内会議なの」

目をきらめかせた彼女の襟にもまた、高等部一年の学年章がある。結局、あの事故からまる一年、彼女は眠り続け、宣言どおり、リヒトたちの同級生となってしまうた。はからずも同級生となった元・下級生たちの驚きはいうまでもないが、目覚めたあとの激変ぶりが、まして彼らを絶句させた。鬼の銀色と呼ばれた少女のとげとげしさ

はすっかり消え、今では、本当に人が変わったのでは、とまことしやかに言われる。なるほど、つましくリヒトに寄り添うさまは、はかなく、内気にも見えた。しかし、

「そういえばあんたたちは、職員室に呼ばれてるんじゃないの？」

はつきりとした物言いはそのままである。ミサビとテッセンは「ああ」と顔を見合わせた。

「そうだったな。面倒くせえなあ」

「じゃ、ちよつと行こうか。どうせ夜には会えるんだから、結果はそのとき。――二人とも、寮に戻るの？」

「うん。じゃあミュー、会議は夕方だろ？――どつか、二人で甘いものでも行こうか？」

「行く」

二人が仲良く去っていったのを見送りながら、テッセンはため息をついた。彼らの後姿は、ただの友人には見えない。当人たちがどう思っているのかはともかく、その甘やかな雰囲気は、恋人のものである。

「あいつがあんな軟派になるとは思わなかったなあ」

テッセンがぼやくと、

「まあねえ」

ミサビが苦笑する。彼もまた、茶色い髪をやや長めに伸ばして、後ろでひとつに結んでいる。彼が通り過ぎる女子に手をふると、歓声があがった。「お前もか」と呆れて、テッセンは大きく鼻から息をもらす。

「まあ――外部生なら、あのくらい普通だと思っただけだね。君が固すぎるんじゃない。封建主義的っていうんだよ、そういうの」

「封建主義おおいに結構。俺は、こうはなりたくねえな」

じろじろと、中性的なミサビの容姿をためすがめつして、テッセンは腕組みした。

ミューが同級生になってからというものの、いつのまにリヒトとそんな仲になったのか、女子のあいだでもちよつとした騒動が巻き起

こった。シンが現在留学中のため、代替としてリヒトの庇護を受けているのでは、という噂だったが、リヒトのどこにも、彼女をひきつけてしかるべき魅力がみあたらないので、みんな、困惑している。幼馴染であることを知るのには、ミサビ、テッセン、今はいいが、クラスメイトのシルル、三人だけである。

ミサビにしても、誰にでも愛想がいいものの、やはり、ときどきこそそこそどこかに出かけていく姿を、テッセンは見ている。女関係だろうと探りをいれても、リヒトのようにあっさり吐かないのが癪だった――しかし、今は、リヒトとミューである。

二人がどうなっているのか、テッセンにも図りがたい。このごろリヒトが何を考えているのか、テッセンにもわからなくなっている。「そういや、素面で愛してるっていえるやつだったか。うーん、平安も変わった。隔世の感があるな」

「古くさいなあ。じゃあ、君は、好きな人ができたらどうやって伝えるわけ。まさか――和歌でも詠むなんて、天地がひっくりかえったってないだろう」

「俺は決まってる。一言、月が綺麗ですね――男ならこれできまり」

「新月だったら？」

「星が綺麗ですね」

「曇りだったら？」

「街の――明かりが……」

「昭和区限定だね、それ」

「――やめよう」

「そうだね」

ため息をつく、二人は、再び、校舎の中へ戻った。彼らにとって、この一年の予定を決める大事な申し渡し、担任からあるはずだった。

「通っただろうか」

歩きながら、いくぶん心配そうなテッセンに、ミサビは一言「なぜ」と、不思議そうでもなく言う。

「君以外に誰が行く？」

「――あの一件がある。俺たちは、いわば、あいつの身代わりでもあるはずだ。それを――出すかな」

「憶測が乱れ飛ぶのは承知の上だろうね。それでも、国家百年の計を崩すわけにはいかない。どのみち、誰かは行かなくちゃ。かえって不自然だ」

「ああ」

「行こう」

職員室のドアノブに手をかけると、ミサビは一気に開いた。

＊

一方、ミューとリヒトは、学園を出て、大正区にある喫茶店へ向かっていった。

歩いていると、じぶんの隣にいるミューに、通行人の視線が集中する。それが、面映く、奇妙に照れて、リヒトは知らずのうちに早足になっていた。

「待ってよ。早いよ」

「ごめん」

あわてて立ち止まり、ミューが追いつくのを待つ。小走りにやってくる彼女の、最近ばっさりと切って短くなった前髪が、ふわりと風に舞って、かたちのいい額をあらわにする。どの一瞬を切り取っても絵になる少女である。元、男だとは思えない、と、そのたびにリヒトは思い、もう女の子なのだから、と思い直す。

店であんみつなどつつきながら、食欲全開のリヒトを前に、ミューは思案顔だった。

「ねえ、昨日」

「ん？」

「シンから……、手紙が、来たんだけど」

「ああ」

「あとね。今度、私の――検査があるの。マテ研に、一緒に行ってくれない？」

「いいよ」

あっさりと言う。同級生になって、ようやく一緒にいられるようになってから、いつもこうだ、とミューは思い、ふと、知らないあいだに増えた彼の癖に気付いてどきりとする。彼女が眠っているあいだ、リヒトはずいぶん成長していた。すっかり背も伸びたし、横幅も増えて、以前のように子どもっぽいところが少ない。再会したとき、ずいぶんな変わりように面食らったことが、昨日のように思い出される。

彼ののんびりとした様子にも不安を隠せなかった――ほんとうにわかっていのだろうか？ 一年と少しのあいだ、何事も無かった。だからといって、これからも何も無いとは限らない。

彼はサンプルだ。天使たちの干渉を受ける身だ。

「夜はどうするの？」

「同窓会」

これも信じられないことに、リヒトは、見かけによらずずいぶんな甘党だった。器の底に残った黒蜜まで残さず飲み干す。ミューの残したものでさらって同様に飲み干し、ごちそうさま、と丁寧に手をあわせてお茶を飲んだ。

「シンさん、なんて？」

「え？」

「他には」

「他……ええと――」

いつか草間士郎に、箒のようだと言われた目が、ミューを見ていた。特有の、どこか遠くを見るような視線の向けかた。こんなとき、ミューは、リヒトのことがよくわからなくなる。

「向こうの情勢と――気をつけろ、って」

「気をつけろ？」

「おとなしくしてろって。――そればかり」

「そう」

彼は、珍しく声を低くうなずいて、それきり、ふと何かを考え込む。

——何か、変だ。

ミューは、最近、リヒトが妙によそしく感じられてならない。忙しい高等部の授業が始まって、進路をはからずも変更させられたことを思い出して腐っているのかもしれないし、ミューと同じ学年になったのが嫌なのかもしれない。いや、こうやってまとわりつかれるのがいやなのかも——

ほうっておくと、どんどん思考がマイナスになる。それを、リヒトは敏感に感じ取ったのか、顔をあげると「ちよっと」と、するどく声をあげた。

「ギン、ストップ——今、なに考えてた」

「なに、って……」

答えに詰まる。こういうとき、うまく言い逃れる術を、彼女は持たない。こういうことにならないように、今までは、人をよせつけずに生活していた。しかし、すでにこの幼馴染の前で、無防備でいることに慣れている。リヒトは、ミューの緊張を見抜いて、表情を和らげた。

「的外れもいいところだよ。違うよ——俺が考えてたのは、別のこと」

「別？」

「最近、思うんだよ。ようやく、今になって、冷めてきた、ということだろう。昨日、夢を見た。修学旅行の夢を。俺が変化した日の夢」

「ああ……」

彼が、京都で修学旅行中に粒子を浴びたという話なら、すでにミューも聞いている。「どういうこと」と尋ねると、リヒトは「本当に俺であるべきだったのか、と——」

と、あごに手を当てる。これも、最近になって出てきた癖である。

そうすると、どこことなく、老人めいた雰囲気は彼は帯びた。

その夜。

彼がようやく暖簾をくぐったときには、座はすっかりできあがっていた。

「遅れました、先生。このたびは、ご結婚おめでとうございます」
座敷に上がると、リヒトはまず上座へむかい、この宴の主役である恩師に、膝をついて頭を下げる。ざわめきのなかで「よしてくれよ」と相手は言った。

「いまさら先生でもないよ——それにしても久しぶりだ」

笑ったのは、キョウタローである。一年半前、平安学園の社会科教師の職を辞してから、今は、町で剣道場と塾の師範をして暮らしている。彼が結婚するにあたって、同窓会を企画したのはミサビだ。彼も今、ここへ向かっているはずである。

先に来ていた面々は、すっかり楽しくなっているようだった。さすがに素肌を出すことはしないが、だらしなく、着物やシャツの襟をくつろげて、酔ったようになって騒いでいる。

「リヒト、何飲む？」

席についたところで品書きをおしてよこしたのは、ワンピース姿のマチコである。少しでも華やかにしようというのだろう、髪に、綺麗なデイジーの飾りをつけている。女子は打ち合わせたのか、皆、髪や胸に生花をさしていた。

「会津中将」

そう決めて彼が店主を呼ぶと、

「俺もお——親父い！ 赤霧島！」

「越乃寒梅。いや、冬玲を」

「京山水」

「オリオンビール」

それぞれのお里がばれそうな酒の名を、めいめいが注文する。

彼らの体は、アルコールを分解しない。分解しないかわりに、吸収もしないので、飲酒の行為は単純に味をみるだけだが、酒の持つ力は、座そのものを酔わせる、という効果を、ここではもたらした。アルコールの影響を受けないので、未成年でも、高等部から飲酒が許可されている。この春待ちわびた特権を得たばかりの彼らは、なにかという酒を飲む機会を探していた。今日と決めて解禁を待っていたものもいて、苦い、だの変な味、だの、初心者まるだしの感想を漏らしつつ、それでも楽しげに杯を重ねている。

しかし、酒が飲める、ということは、慶事でもある——そう、文字通り今回は慶事だった。キョウタローの結婚。ようやく彼に訪れた春を祝う場である。

しかし、そこでただひとり、テッセンだけが浮かない顔だった。

「どうしたの。あれは、合格だったんだろう。——また、タエコさんに怒られる？」

「ん？ いや……ああ、まあな」

長年、藤原家に仕えてきた家政婦の女ボスであるタエコは、もろの集まりでテッセンが居酒屋へ行くことを快く思っていなかった。いわく、居酒屋などは下男が行くところだから、であるらしい。藤原家の御曹司が行っていい場所ではない、という。

しかし、テッセンの悩みは、べつにある。酒が来て、一献傾けたあと、リヒトは口を開いた。

「あらためまして。こんな場で……ご愁傷様——というのも他人行儀だけど。俺も、本当にテッセンの母上が好きだった。残念だ」

「いや。——ありがとう」

「どういたしまして」

テッセンの母、藤原緑が亡くなったのは、彼らが高等部に入学してすぐ、卯月初旬、桜舞い散る春の日のことだった。つい一ヶ月ほど前になる。葬儀はしめやかに行われた。テッセンを宿したために生きながらえていた女の最期が穏やかだったことが、一家のただひ

とつの救いだった。すでに、リヒトは、藤原家の内部の様子も知っている。最期の日まで、“火宅”にテッセンの友人として出入りしてきたし、彼から、家庭内の事情も聞いていた。テッセン自身は、葬儀後すぐに突入した実践授業のおかげで、母を失ったショックから遠ざかっていたが、最近、ようやく、心がそちらに向いていたところだった。

「それで。母上が亡くなってから、あの家をどうするつもり。タエコさんは」

「本宅には、いまさら、俺は戻る気はないんだ。また、国に帰るなんて、タエコもいまさら思っちゃいないだろう。俺も、はいさようなら、と家から追い出すほど冷淡にもなれん。俺が生まれてから——いや、生まれる前からか。タエコはずっと母に仕えてきた。ぼんくらの末息子の面倒まで引き受けて、今じゃそれが、あいつの生きがいみたいなものだ。今までどおり、二人であの家で暮らすさ」

「家族は、それで？」

「まあ、反対されてるな。親父が特に——」
「そう」

リヒトはため息をつく。テッセンは、うんざりと、落ちてきた髪を後ろにかきおくる。

「俺の留学に関するあれやこれやが出てきてから、姉や兄まで巻き込んで、ちょっとした騒動だ。どのみち、今日はまた、本宅に帰らねえと」

彼の留学先は、米国にある蓬萊ゲッターである。彼はそこに、武術の研鑽を積み留学する——というのが、昼間、彼とミサビが職員室に呼ばれていた理由だった。リヒトがせがむと、テッセンは、「選考結果通知書」という、簡素な書類を見せてくれた。

「ミサビは？ あいつもそれで遅れてるんだらうけどな」

「あ、うん。一度寮で会ったけど、用事みたいだ」

ミサビもまた、秋から他ゲッターへ留学することが、さきほど決まった。フランスにあるイース・ゲッターで、彼は語学留学である。

あいついで決まった親友二人の留学が、しかし、リヒトは心配だった。

あの事故から二年が経とうとしている。

まずまず、何事も無く過ぎた。あれ以来、妙なことも起こっていない。天使からの干渉もない。嘘のように平和だ。ときおり、彼は、自分がサンプルであるということを忘れそうになる。

逆に平和でないのは、外の世界だ。

「気をつけてね。最近物騒だって——もっぱらの噂だ」

「わかってるよ」

平和を絵に描いたような彼らの生活と異なって、いまや、世の情勢は多難のように見えた。アフリカのゲットーでは、地域住民との間に、ついに武力衝突が起きた。きっかけは些細だ。子どもが変化したためにゲットーに連れて行かれた、という親が、他の同様の親と武器を手に、政府に乗り込んでいき、子どもを返せと直談判をした。変化したとはいえ、わが子は手元で育てたい、その権利があるはずだ、というのだ。口論のすえ、その担当部署にいたゲットーの高官五人が殺され、容疑者の身柄を引き渡す、渡さない、で、ゲットーと現世の政府のあいだで熾烈なやりとりがされた。その後、母親に同情し、政府の対応に激昂した住民が、ゲットーを包囲した。自国の軍隊までが出動して騒動を押さえ込もうとしたが、不満を爆発させた国民を前になすすべもない。最終的に、彼らに対抗すべく出動したのは、アフリカ・ゲットー軍である。そして、ついに戦端が開かれ、あつという間に戦闘は終了した。

あらかたの予想通り、敗れたのは、包囲したほうだった。死傷者は幸いにも出なかった。しかし、それこそがもつともまずいことであつた。時間を操るゲットーの住民に、物理的攻撃が効かないことがあらためてわかり、それは、全世界の人間を絶望させ、震え上がらせた。

結局、ゲットー側が寛大にならざるを得なかった。もとより、高官五人の賠償金は法律により放棄せざるを得ない。痛みわけ、とい

うように現世では見た。しかし、どうみても、ゲットー側に不満が残る決着である。何もしていないのに五人が殺され、包囲され、正当防衛で対抗すれば恨み言を言われ、賠償金まで放棄させられたのである。かくして、ゲットー内に、人間たちへの嫌悪感が広がるのであった。

「やめてほしいな。今まで平和でいたものを。いまさら戦って何になる？　そう思わねえか？」

「平和では、世界は一步も進まない、ってギンが言っていたけど」

「そうだ。しかし、なんか、きな臭い雰囲気なんだよな、最近。それがらみ、ってわけじゃないだろうが――上のほうがばたばたしてるの、知ってるか？」

「それもギンが言ってた。近々、人間側が何かしそうだって」

「ああ。そういえば……お前さ、今、ミューとは――」

「すみません、遅れまして」

歓声があがって、そちらを見ると、ミサビが到着したところだった。彼は、型どおり、元担任に祝辞と挨拶をのべると、二人のもとにやってくる。

「シルルを連れてこようとしてたんだけど、駄目だった。――また、頭痛がするって」

困ったように、肩をすくめた。

「そう。大丈夫かな」

同じく、サンプルの秘密の共有者であるシルルは、あれから、頻繁に体調を崩すようになった。以前は明るかった性格も、今ではどこか歪んで、そのギャップに自分でも恐怖を感じているようだ。シルルだけが、あの東京で別のチームにいた。彼らには分からない苦しみが刻まれているのかもしれない。

「お前は、秋からだっけ」

ミサビにむかって、テッセンが、留学の開始時期について尋ねる。「そう。テッセンは来月すぐ？」

「ああ。でも、夏に一度帰って来るよ。で、次がどこかは、まだ未

定。お前らは？」

「変わらず。でも、夏は、僕らは、仕事かな。去年と一緒に。別荘のついでに、遊びにきてよ——でも、今年は、向こうでの小遣いくらい稼がないと。遊んでる暇ないかも」

「私も留学だよ！」

横から声をかけてきたのは、マチコだった。いつの間にジャズミンテイーをやめたのか、ワインを手に、頬を赤くして、声がいつもより大きい。

「ロンドン！ ロンドン橋渡るんだよ！ 短期なのが惜しいよ！」

「被服だっけ。ますます腕があがるんじゃない——あ、カレン。マチコを引き取ってくれる」

「お騒がせいたしましたわ」

キョウタローのせつかくの祝いの席だから、ということと呼ばれていた、現在高等部三年生のカレンは、今年、とうとう、籍を平安市に定め、これからはずっと平安市民である。「今度は私がマチコを待つからねえ」と喋る——彼女は、印僑であった父親と、アメリカと日本の混血の母を持つため、インドにあるゲットーと平安ゲットーの、現世なら二重国籍であった。すでに、舞踊家として、平安市以外でも名高い。彼女とマチコが、女子たちの群れに消えたあと、テッセンが、

「夏ね」

と、彼には珍しい、アンニュイな声色で言った。

「なに——どうしたの」

「何か不安でも？ いまさら？」

「いや、ちよつとな。ちよつと、相談したいことがあったんだが」「なに？」

「来たんだよな。あれが——」

「あれってなに」

やけに口ごもり、言い洩るテッセンに、いらいらとミサビが言った。テッセンは「ここに来る前、決まったって報告しに——実は一

度本宅に行つたんだが。とうとう、来た。母が亡くなつたからだろ
うな。早いところ、俺を縛り付けておきたいんだろ——縁談が」

「縁——」

さすがにミサビも絶句した。リヒトも言葉を失つたが、いち早く
回復して「結婚するのかテッセン!？」と、枡になみなみと注がれ
ていた酒をこぼした。

「しいっ」

あわてて、テッセンが彼を押さえつける。幸い、他に気付いてい
るものはいない。

「あ、相手は……?」

気の毒な女子もいたもんだ、と、友人に対してまことに失礼なこ
とを思いながらおそろるおそろる尋ねると、テッセンはますます表情を
厳しくして、ぼそりと言った。

「何、きこえない。誰?」

「——ヨラ」

「ああ、」

なんとか聞き取つたミサビが声をあげた。しかし、すぐに、その
声は、どこか、不安を帯びたものになった。

「それは……、懐かしいね」

不思議な調子でうなずき、困つたようにひっそりと笑う。からか
いの言葉は出ず、二人とも、顔を見合せて黙つた。首をひねるリ
ヒトだったが、次の瞬間、彼もため息をついた。

「サヨラさん、というひとはね。君は知らないだろうけど有名だよ。
通称、虫愛ずる姫君、という——」

「ミサオの妹だよ」

「ミサ——オ、の、」

一時期、リヒトと寄宿舎の同室だった少年。妹がいたのか、とり
ヒトは驚いた。もちろん、ここは平安市なので、血のつながりの無
い義理の妹なのであろうが、まさか、そんなひととの縁談がテッセ
ンにくるとは。

本人も「晴天の霹靂もいいところだよな」と呟きながら、手にした杯を干す。どうやら、気の毒なのはテッセンのほうらしい、と悟って、リヒトはまばたきをくりかえす。いつもの不遜さは影をひそめ、信じられないくらい苦りきった顔である。

彼は言った。

「たしか、何度か会ったことがあるはずなんだよ。親父の会社がらみのパーティーやらで。でも、俺が本宅を出てからは、そういう集まりにも無縁だったし……もう、顔も忘れちゃってたな。それが、円城寺家から、俺が今どうなってるかっていう探りがあったんだと、去年の春ごろ。で、親父同士が乗り気になったらしくてな。今度、俺が留学するっていうのを、あちらさん、いち早くどこからか聞き込んできたんだろう。そりゃ、将来有望なんだ、と、どうも勘違いして、で、数ある候補者の中から俺に絞ったってわけだ。娘どうか、ってな。その話が、ついさっきだよ。そりゃ、こんな顔にもなるわ」

テッセンは、うんざりと頭に手をやった。

「ミサオと同級生だった、ってのも、妙に向こうの両親の気になってたみたいだな。あの日なくした息子のかわりに、なんて思ってたら、面倒だぜ。そう思うと、今から気が重い」

「お察しするよ。また、それは——光栄な、とっていいのかどうかねえ」

「光栄なもんか。あのこまっしゃくれたマセガキだぞ。どこをどうとったらそんなセリフが出るんだよ」

「光栄って？」

リヒトが尋ねると、

「ミサオの妹っていうとね——リヒト、彼女に会ったことないでしょう。不思議だと思わない？」

「というより、今いくつなの。中等部にはいなかったよな、そんな子」

「そう、いないの。というのも、彼女、すごくてね。ある意味、シ

ンよりすごいかな。粒子操作力に関してはからっきしなだけど、学業全般においては、六歳で初等部の全課程を修了、八歳で中等部卒業資格、十になるとときには、もうすでに高等部も出てた。それで、たしか今は、十三になるはずだよ。十六のテッセンと——と、先方が考えても、まあ、おかしくない」

「簡単に言うなよ」

テッセンは、口をへの字にした。ここまで弱っているテッセンは珍しい。

「ふうん。すごい秀才なんだなあ」

「いわゆる、そう。才媛ってやつだよ。で、今は——」

「虫愛ずる姫君」

ぼそりとテッセンが言う。

「虫めずる、……虫が好きなの」

「ちよっと変わってるんだよねえ、彼女」

ミサビが首をひねった。

「今だから言えるけど、それで、ミサオが寄宿舎に入っていた、というのもあるかもね——ああ、カレン、ありがとう」

ロゼワインのグラスを受け取って、ミサビが笑う。彼の笑顔にまったく無反応なのはカレンくらいで、悪魔的でさえある妖艶な笑みを浮かべて「どういたしまして」と下がった。

「それで、だ。親父がな。留学する前に、本人と一度会って来いっていうんだよ。先方も、本式に決めたわけでもないし、うちだって、この先どうなるかは、まだ決めかねてる、というんだ。だからとにかく一度会ってみろ、と。俺だって、ふざけるな、くらいは言ったわけよ。でも、そしたらあの野郎。会ったうえで、双方が、あまりにも気にそまないようなら、白紙に戻してもいい、という——そのくらいの柔軟さはあるわけだ、一応。ふん、だったらいいそうですかって、素直に会うと思ったら大間違いだよ。そしたらさ」

テッセンは、懐から紙切れをだして、二人の前のテーブルに置いた。何か、字が書かれている。

「兄の最期についてお聞きしたいことがあります、だと。会いにいらっしゃい、だそうだ。その、サヨラ嬢本人から——ここに来る途中、アルリシャがとつかまえた虫が持っていた、その文を。向こうは、どうやらまんざらでもないのかもしれないかもしれん」

「電光石火だねえ。ふうん。で？」

「行ってくるよ——一応な。兄の死に様をだしに、人のツラを拝もうなんて根性の女は、死んでもごめんだが」

ミサビとリヒトは顔を見合わせる。テッセンは、心の底から腹をたてているようだった。どん、と杯をテーブルに置いて、険しい顔で、騒ぐ同級生たちをじろりと見た。

いちだんと騒がしくなった座敷。

キョウタローの新妻であるルリが登場したためであった。拍手のなかで嬉しそうなキョウタローを見つつ、「おめでたいこった」とテッセンは肩をすくめた。彼にとっては、慶事もあてつけのように、今日とは思えたようだった。

とにかく、これがこの年の春だったのである。

六月、ミサビとリヒト、ミューは、壮行会を開いてテッセンを送り出した。「手紙をくれよ」と言えば、「さっさと相棒を見つけりゃよかったんだ」と、別れを惜しむというより形式美として「姐さまあ」「ああ、ひゅうがちゃん」「お姉ちゃま、お元気でね」と言い合う彼らの使い魔を横目に毒づかれる。彼らがいれば、かくりよを介して、ただちにメッセージをやりとりできる。たしかに、思ったが、リヒトは苦笑いを浮かべるばかりだった。

使い魔について、彼は思うところがあった。ミサビから「楽しいよ」、ミューから「寮の閉門後にだって、これでおしゃべりできるのに」といわれても、いまだ、探す気になれないのも、つきつめればそのせいである。

かつて退院したばかりの頃のこと——サツキの相棒であった政宗に、新しい主に、と懇願されたこと——その、黒狐の憔悴した様子が、彼の記憶に強烈だった。どうして自分に、とおそろおそろ尋ねると「せめて、あるじの友人だったひとと縁を結ぼうと思ってな」と政宗は告げた。魂と魂で契約を結んだ主従が、突然に引き裂かれる悲しみが、その声にはあふれていた。

「なア、ご友人殿。お受けしてはいただけまいか？」

だけど、とりヒトは答えた。自分は決して故人の代わりにはなれない。「お互い、あとで苦しいだけだよ」——やんわりとお断りすると、彼は一声さびしげに啼いて、鎮守の森へと去っていく——その後姿に、そうか、俺が死んだら、そいつはどうするんだろう、と感じた。

これ以上、他の誰かの人生を狂わせられない。

「いいよ——今のところ、いなくても不自由は感じていないから。しばらく独り身でいる」

テッセンは、ちえ、と言って、頭をかいた。

「しょうがねえなあ。月に一回くらいなら、書く気にもなれるかもな。報告書のコピーでよければ送るけど」

「それはいい」

それが、最後の言葉になった。総府の人間に連れられて、彼は、マチコたち他の留学生とともに去っていった。夏まで、しばしのお別れである。

リヒトは、彼を四月から悩ませていた胸の内を、ミューにだけ打ち明けて、あとの二人には黙り込んでいた。テッセンもミサビも、ときどき妙に静かになるリヒトを不思議に思っていたが、友人の留学を前にさびしくなっているのだろうと思って、特に気にしなかった。

男の友人だから打ち明けられないことだってある。

その日、風呂からあがって、部屋に戻った彼は、男子寄宿舎の高等部伊棟——中等部のときにいた羽棟より、二畳ぶん広くなった部屋で、鏡に自分の姿を映して、見入っていた。

この目。この体。

今なら、はつきり言える。

世界に一つだけ——ではない。

彼が変化したのは、おそらく、そう、あのときだ。

脳裏に、ある場面がよみがえる。

三年前、京都、夏。

金魚のように赤い帯の端をゆらめかせて、小路を走っていった少女。同じようにたむろする学校の生徒たちのなかで、なぜ、彼らにだけ、それが起こったのか。そのむこうにいたグループだって、同じように、班のみんなであつまっていた。

そして、その、生徒たちのなかに、自分はたしかに——

そして、

「——あのニュース」

鏡の中の顔が陰しくなる。

じぶんの魂が、がイチカのハクに定着したというのなら、あるいは？

ふと、ドアが開いて、同室のグエンが入ってきた。帽子を壁のフックにひっかけると、無表情にリヒトを見る。「ただいま」と挨拶をして、屏風で区切られたスペースへ入っていく。

グエンは静かだ――ほとんど、自分のことについては話そうとしない。彼もまた、リヒトがサンプルであることを知っているはずだが、今まで一度も口にしない。

鏡に見入っていたことを見られた気まずさがあつたが、思い切つて話しかけると、

「グエン、さあ」

答はしばらくしてから返ってきた。

「なに」

衣擦れの音。彼は、授業終了のあと、どこぞへ出かけているようで、毎日帰りが遅い。やがて、浴衣になって姿を現した。

「なにか用か」

「いや。変化したとき、どうだったか、と思って。いやじゃなければ知りたい」

「俺の家は貧乏だった」

唐突に彼は言った。

「養子に出されたが、そこが寺の住職のところだった。その親父殿が、ゲットーに招待されたので、手伝いで、ここの東北の――修行場に行った。それで」

「感染した？」

「そうだ」

うなずいて、グエンはそのまま、クローゼットから写真を出した。促されて見てみると、そこには、小さい頃のグエンが、今の彼のミニチュア版といった坊主頭で写っていた。場所は、どこかの寺院のようだ。平安市にはさまざまな宗派の寺社があるが「曹洞宗」とグエンはつけたした。

「初日だった、と記憶している。これを撮った夜に、担ぎ込まれた、マテ研に」

「あ——そう」

「不思議なもんだな」

「不思議って」

「ここで暮らしてる普通の人間は多い。技術を伝えに来るもの、医療関係、政府関係。そのなかで、制御装置をつけてれば平気だ、と、長年無事に暮らしてるやつもいれば、ここに来た途端に、羽化転生の憂き目を見るものもいる。その差が、不思議」

「そうだね……」

藤原家のタエコなど、その筆頭だろう。彼女はそもそも看護師で、平安大学付属の看護学校に講師として招かれ、病院で指導を行ううちに、藤原緑と知り合って、家政婦として藤原家に雇われた。それで、今もピンピンしている。

大工など、職人たちを筆頭に、無事なものはたしかに多い。

「似たようなこと、ミサビも言ってたな……」

「それで」

「ん？」

「お前が鏡を見てた理由は」

「ああ——」

口ごもっていると、グエンは「そういえば、お前あての手紙が来てた」と、写真をしまいながら言った。

「手紙？」

「総府だな、あの形は」

「ああ。ありがとう。行ってみる」

理由を話さずにすんでほっとした。グエンは追求しなかった。二語文以上話したのは初めてだな、と思いながら、彼が事務室前の在籍板の前に来ると、たしかに、手紙が届いていた。名札の下にあるメールボックスからはみ出した封書を取りだし、その場で開く。書かれていたのは、なんというタイムリーな、という通知だった。

インヴィテーション、と呼ばれるものである。平安市の住民に与えられた、家族との再会のチャンスだった。毎年、抽選で選ばれたものが、平安市へ家族を招待できる。学生への割り当ては七月から八月の夏季休暇で、そのあいだは、武道も補習授業も免除される。

『

親族招待許可について

抽選の結果、貴殿の親族を、今夏、平安市に招待することを許可します。

希望者は以下の欄に、四親等以内の招待したい親族の氏名を記し、誓約書に署名捺印のうえ、同封の返信用封筒で返送願います。

総府より先方に確認のうえ、おって滞在施設、日時などお知らせいたします。

』

夕食の席で、それを聞いたミサビは「良かったね」と言ってくれた。話題はそこから、異国の地にいるテッセンやマチコの話になる。食事が終わると「足りないでしょ」とミサビは笑い、リヒトはうなずいた。

「何か、ある？」

「厨房から、野菜屑をもらってね。いいスープができてる。リゾットは？」

「いいねえ」

育ち盛りの食欲が、食物を要求してやまない。夕食のあと、デザ

ートがわりにミサビの手料理のご相伴に預かるのが、ここ半年の習慣だ。共同スペースにある丸テーブルで、チーズを散らした刻み野菜のリゾットを食べていると、下級生や同級生が次々とやってきて、うらやましそうな表情で通り過ぎていく。料理人志望だったミサビの腕は、寮の生徒じゅうに知られているのだ。「今日は二人分しかないから」と、のぞきにくる生徒たちに断りながら、ミサビは、自分のぶんには手をつけず、リヒトの食べっぷりをじっと見ていた。「それだけ食べてもらえたら、野菜屑も本望だろうねえ」
彼は笑った。

「で、味は？」

「俺は、もっと塩がきいていてもいいな」

「ふむ。なるほど」

メモをとりながら、ミサビは何を思いついたのか、薄い唇を、ふ、と綺麗な半月にする。がつがつとつめこんだあと、リヒトは顔をあげ、

「ミサビは食べないの」

「ああ、これは、僕のじゃないから。――それより、気になることがあってね」

「ん？」

「何か、考え事してるでしょ」

「どうして」

「君はすぐに顔に出るから」

「ええ？　そ、そうかな……」

「ミューとばかり喋ってるから、それも妙だって、最近気になった。テッセンにも、君については、気をつけるように言われてるし」「なにそれ。まだ保護者きどり？」

「自分が居ない間に何かあったら、と思ってるんだよ」

「そう……」

潮時かもしれない。

よりによって、インヴェイションまで来てしまったのだ。それ

に、彼らは夏の間、別荘地でのアルバイトを予定している。家族の逗留場所は、別荘地近くのホテルに決まっていたから、どちらにしろ、ミサビには知られる運命だったのだろう。

食後のお茶を飲みながら、

「もし、俺と同じ魂をもつものがいたら、そいつも、このハクに馴染んだらうか。ねえ、ミサビ。ミサビはどう思う」

「——ん？」

ミサビは怪訝そうな顔をした。

「インヴィテーション。すごく嬉しいけど、迷ってる」

「どうして。ご両親に、会いたくない？」

「会いたいさ、すごく。会いたい——弟にも。でも、俺ね。双子だったんだ」

「双子？——双子、……ってことは、」

「そう。テッセンには、言えなかったけど——もしかしたらね」

リヒトは、満腹の腹をさすりながら、天井に吊るされたランプの炎を見上げる。

「ここにいるのは、本当は、俺の弟だったかもしれない」

これが、今年の彼の夏の引き金になるとは、彼らは露ほども知らなかった。

平安市から時差九時間の場所では、暗い空に、毒々しい色をした雲が広がっていた。もともと、天候の変わりやすい地域として有名である。ねっとりとした夜気につつまれた町の様子は、この時期には珍しくないが、くわえて春の嵐が都市を襲ったため、往来にはすでに人の姿が無い。瓦斯灯から火が消える瞬間を目にして、

「マラルメが描いた夜だな」

ふと、昔読んだ詩の一節を思い出し、その男は、窓の外を見て呟いた。もうひとり「あの雲がもしもその詩の一遍なら」と応じた。「友よ、ここに在るわれわれは何になる？」

「決まってる。偽りの薔薇色の理想だよ」

「そう、だろうか。――残念ながら、薔薇ならば、しかもそれが偽りとなれば、何色もの同類を生むものだ。われわれが一つではないように、理想もまた一つではないのだ」

窓の外は雷鳴だった。風は、狼の吐息となって煉瓦の壁を揺さぶっている。うずまく風の模様を木々のざわめく形によって想像しながら、ロンディニウム・ゲットー――イギリスはロンドンにある大西洋連合第二のゲットー――の市長、リチャード・ブラックは「たしかに」と重々しく言った。相手は、イース・ゲットーの魔的研究所イース支部所長、ジャン・ラロンドである。二人は友人同士であったが、多くの権力者の使う“友人”がそうであるように、それは彼らにとって、子どものように純粋な意味ではない。

「その話は本当か？」

まわり道を経て、ようやく本題へ入り込む。

「らしいよ。最近、うちに来たものの話によるとね」

「この間の発表では、まだまだ——だったのにか」

「ダメーだった、と見るべきだろうな」

彼らの口調は、ともすると、独白のようにも受け取れる。向かい合っていないながら、けして視線を合わせようとしな——というのも、ラロンドのほうは、政治家を馬鹿にしきっているし、ブラックのほうは、研究者など国の飾りだと思っている。勲章が多いほど自国のレベルの高さを誇示するのに役立つ、というわけだ。しかしとにかく、イース・ゲットーとロンディニウム・ゲットーは、同じアトランティック・ユニオンに共存する、いわば兄弟なのだし、マテ研支部同士も、現在とはほとんど、二つで一つとっていいほど技術と施設が提携している。

「蓬萊か。まさか、あそこが一步ぬきんでは思いもしなかったね。生物学の分野においてはロンディニウムの右に出るものはいないし、物理学においては、イースの研究者たちが最高だと思っていた」

「最近では、どこも馬鹿にできないよ。われわれの独壇場は終わった。第一——魂魄、幽界といったものを説明するのには、東洋思想のほうがすぐれていたからね。生物地球学、というものを打ち出したのは、人種でフルコースができるほどの、自称、自由の国——だったし」

「呪術、錬金術、医術、音楽。そして虚構。それらが、歴史上ついにひとつになるときは近い、とな」

「この、スチュアート・チャンという奴は、間違いなく、現世で子供のころ、夢想家だったに違いないよ。ゲーム好きのオタクだった。賭けてもいい」

「君も人の事は言えないだろう」

「お互いさまだ」

陰險な笑みが唇から漏れていたが、これも、お互い、自分だけは高尚な笑みを浮かべていると思ひ込んでいる。

それはそうとして、問題は、スチュアート・チャン——蓬萊の一

人の科学者だった。引き抜くにも蓬萊市が離さず、止めても無駄なタイプだ、というのは、彼らが手にした報告書からも知れる。

「やっかいだねえ」

「ああ……」

「彼をどうにかすれば、チームは解散するかね？」

「ヒルガーが彼ごと売ってくれなかったのは痛い。何しろ、特許の問題がある。実現には、絶対に彼をこちらに引き入れることが必要だった。だからといって、もう、消すことも無理だ。ここまで抜きん出てしまっている——天才、というものはね。望むと望まざるに関わらず、彼もそれこそ、サンプルに匹敵するよ。あの、フェアシユミット——最初に粒子を発見したものや——ヴェネストロム、若さと生をすべてマテキに捧げて死んだものたちと同じ。まったく……」

「先に出せる見込みはない、というわけか？」

「ゼロとはいわないよ。アプローチの仕方は、いくつもある。もっとも有力なものが欠けているというだけで」

「そうか。しかし、それで地位を確立しても、やはりどうしても、頭を下げて売ってもらわなければならないわけだ。それには違いないだろう？」

「そう……、ふっかけられるに違いないな」

「だが、入り込める余地はある」

市長は、閃光と雷鳴のあいだに、その暗い緑色の瞳に希望の光を宿して、ラロンドを見た。ラロンドは、内心の疑問を隠して、無表情に首をかしげた。市長は低く笑い、手にした資料を机に投げ置いた。

「よくよく調べたところ、彼は、最後の実験に必要な人材を探している。それが、こちらの人間なら、たとえばどうかね」

「こちらの人間？」

「うまくいけば、裁判に持ち込める」

「裁判」

ラロンドは驚嘆した。自分には考えもつかなかった案である。法廷での決着など、この件に関しては念頭に置かなかった。彼もまた、最先端の技術は綺麗なままで世界に公開したい、と思っている人物だ。何にもまして、彼の気持ちをこの方法に向けさせなかった理由は、彼にも残っている科学者の誇りだ。これだけは、ただひとつの傷も許せない。きれいなままで世に出したい。これは、そういう種類の夢だった。あっさりと打ち壊してくれた市長に鼻白んでいると、市長は、おかまいなしに「どうかね」と、高圧的な態度で迫る。

「よく考えたまえ。これしかないのではないかね」

「そう、ですねえ——」

たしかに、もっとも有効そうな手ではある。灰色の決着、といわれても、後世に名が残せるのならないのではないか、と思われた。

「では、人選をしませんと」

「それはもうすんでいる。すでに、現地に向かわせた」

「何ですって。誰ですか」

「ミシエル・マクミラン——ハイラム・モリズロウ、それから、エレナ・ウェールズ。年齢は、十八、十七、十五。あちらが留学生をご所望らしいのでね。うちのとおっておきを行かせた。ミシエルは、君のところとの二重国籍だから、その子を選ばれば僥倖。イース市長にも話は通してあるからね」

「そうですか。では……」

「われわれの、最初の魔法使いに乾杯といこう」

市長は、机の上のベルを鳴らす。すぐに、使用人が、バケツに冷えたシャンパンを運んでくる。黄金にプラチナの泡を散らす液体がグラスに注がれる。ふせぎようなない心中の不協和音を響かせたまま、二人は静かに乾杯した。

「ところで、アフリカはどうなっているかね。あそこはまた、思いついた行為に出た。君の意見を聞きたいね」

「アピールでしょうね」

ラロンドはゆっくりと言った。

「われわれは歓迎しましたよ。五人は尊い犠牲だが、あれで、間違いないく、ゲットーというものが、ちゃんと近所に存在する、と世界にアピールできましたから。まあ――クサマは大喜びしたでしょうな」

「ああ、それはそうだな。まあ、うちも移行は済んだからね――対岸の出来事だと笑っていられるのが嬉しいね。平安は思い切ったことをやると思ったがね。まあ、国土の問題もあるからねえ――それを思うと、平安ほど、魔法を切望しているゲットーはないだろうねえ」

「日本、か。相変わらずあの国もよくわかりませんかねえ」

「まあいいさ。それより、もしも魔法というものが現実になった場合、法整備をどうするか、というところがまた、厄介だね」

「で、それが済んだら、いよいよ戦争ですか。しかし、例のは……」
「たいしたことはないに決まっている」

「そうですかねえ」

「そうだ。君は心配性すぎるよ」

「はあ、そういわれると、言葉もないですな」
くく、と二人は笑った。

両方とも、まったく愛着を覚えない顔を見合わせていたので、雷光に混じって、別の光が窓を横切ったのに、気付かなかった。

2 留学生

一方、蓬萊市。

とはいえ、簡単にはいかないものである——と、スチュアート・チャンは、自分の思考に字幕をつけながら、構内を歩いていた。彼は、週に数回、大学の講義を聴きに行くことを息抜きとしていて、それを理由に、大学と隣接する蓬萊ジュニアハイスクール、ハイスクールのなかも自由にうろつく権利を得ていたが、彼の欲しい人材はというと、なかなか簡単には見つからないのだった。

学生たちが走り回っている。懐かしい光景に目を細めながら、彼は、手にしたジュースの紙コップに口をつける。

「他校の校章、他校の校章、他校の校章——」

留学生はさまざまいたが、いまだに、意中の人物とはぶつからず。しかも、その人物と出会ったとしても、厳しい条件をクリアしてくれるかどうかはわからない。

彼が掲げる条件は五つある。ひとつ、留学生であること。ふたつ、金で言うことを聞くこと。みつつ、出身ゲッターのナシヨナリズムに染まりきっていないこと。よつつ、強い、ということに重きを置いて疑問を持たないこと。いつつ、口がとんでもなく固いこと。

とりわけ、最後の条件は重要である。友人などに不用意にもらされては困るし、国元への報告書に書かれても困る。見る目が厳しくなるのは当然だった。

四月、五月、六月と日が経つにつれて、もうそろそろ決めなくては、という時期にきていた。小麗が、これがどうかと持ちかけてきた留学生が数人いる。とりあえずキープしておいて、彼はしかし、自分でも協力者を見つけるのだ、と意気込んでいた。なにしろ、自分の人生がかかっているのである。彼自身も忙しいが、ここで手を

抜いては絶対にいけない気がする。しかし、

——今日も駄目か。

散歩のタイムリミットが迫っていた。

『燃えよドラゴン』のテーマを口笛で吹きつつ、何気なく彼が、駐輪場へ向かうコーナーを回ったところだった。

ふと、彼の視界に、道着姿の一団が映る。オレンジをベースにした生地、蓬萊、と白い縫い取りがされたユニフォーム。そのなかにひとつだけ、『平安祖界』の四文字を背中にしよった、白い道着姿がいた。平安ねえ、友好都市ではあるけどねえ、とそちらを見たスチュアートは、おやと思った。

——なかなか、頑丈そうな体をしている。

高等部の一年生、というのだけは分かった。口が堅そうだ、というのが、遠目に見たその少年——というには、ごつごつしすぎているし、老け顔だが——の次の印象である。彼はその一団をやり過ぎたあと、あとからやってきた同じ道着姿の一人をつかまえる。

「ちょっと」

自分がマテ研の人間であることをアピールしつつ「君たちのところに、ハイスクール一年生の、平安市からの留学生っている」

「ああ」と相手はうなずいた。

「テッセンのことでしょうか」

「テッセン？」

「平安市からの留学生ですよ。今月初めから、武術を学びに来てるんです。テコンドーは一週間で初段までいったみたいですが、うちじゃあそうはいきませんから、もんでやるつもりです」

に、っと笑って、少年は胸を張った。少林寺、とそこには書かれている。

「あ、そう。ありがとう」

「どういたしまして」

一礼すると、少年は、あっというまに走り去って行ってしまった。テッセン、テッセン、とその不思議な響きを口の中で繰り返しながら

ら、スチュアートは大学の事務室に引き返した。

「小麗！ シャーオーリーイー！」

「わっ、びっくりした。なあに、老師。まだ何か？」

小麗は、事務机の前でひっくりかえりそうになりながら、スチュアートに顔をむけた。事務室と廊下を隔てる窓ガラスを、スチュアートが叩くと、おっくうそうに立ち上がり、埃を払うしぐさで、両手を体の前で叩きながらやってくる。お菓子をつまみぐいしているところだったな、と彼は思ったが、小言はさておき、目当ての人物についてである。事務室の隅にある応接スペースに入り込むと、ソファに座る間も惜しく、スチュアートは、先ほど見かけた留学生について話した。

「テッセン？ テッセンテッセン、T——ちょっと待ってね」

吐き出されたデータを持って小麗がやってくると、スチュアートはその紙をむしりとるようにして、一秒で目を通す。

「平安市は、はたちまで姓を非公開にしているところがやっかいだな。しかし、いいところのおぼっちゃんには見えなかった。おそらく孤児だろう。成績は——うーむ、文武不両道もいいところだな」

「え、老師。この子にするの？」

「ちよっといいなと思ってね。体力馬鹿そうだったし。とにかく、声をかけてみようと思う」

「え、ぜんぜんかわいくないよ、この子」

「なんで女ときたら、見た目ですべてを決めようとするんだ」

「綺麗なほうがいいに決まっているじゃない。ねえ、こっちのほうがいいんじゃない？」

「一人というわけにはいかないから、君のご推薦の四人だか五人のなかからも、何人か選ばせてもらいますよ。とにかく——」

スチュアートの目が眼鏡の奥で光る。

「時間が惜しい。この生徒の詳しいデータを、できる限りとってくれるかい。蓬萊市での住所と連絡先と」

「イエスボース」

小麗は敬礼すると、言われたことをメモしはじめる。ふと、スチュアートは、履歴の年号に目を通してながら、胸騒ぎを感じた。それが何か気付いたのは、

「二年前、二年前——平安人。学生——あつ」

あの、遭難事件。

新聞記事が脳内を横切って、急ブレーキでとまる。

驚きを飲み込んで、スチュアートは、短い髪を細い指でかきまわした。

「もしかしたら……？」

テッセンというあの少年が、サンプルという可能性はないか？

いや、もしそうなら、平安が留学生にはしない？

しかし、あの事故でかなり死んだから——逆のパターン、つまり、留学しない生徒こそサンプルである、と思わせないために、あえて放出してみる、というのもあるかもしれない——

彼は、サンプルに対しての予備知識があった。平安にそれがあるらしいということも知っている。二年前の事故の真相が、それららみでかもしれない、ということも。

もしもテッセンという少年がサンプルならば——そうでなくてもかまいはしないのだが——うってつけた。

武者震いに、のどの奥からうめき声もれる。

ふと気付くと、何も知らない小麗が、不気味そうに彼を見つめていた。

「やっとツキがまわってきたぞお」

年齢に似合わない俊敏さで、五百メートル先のマテキ研究所へと走っていくスチュアートを見送った小麗は、玄関でやれやれと肩をすくめた。

「つまらないわあ。美少年のほうがいいのに」

＊

さて、この一幕をまったく知らない留学生であるテッセンは、一キロ先の道場で寒気を感じていた。くしゃみまではしなかったが、道着から出た腕をこすって「蓬莱は空気が乾燥して、春なのに冷えるなあ」と、つたない英語でクラスメイトにもらす。それを聞いて、ジム・リーという、褐色の肌に亜麻色の髪を持つ、大柄な少年は笑った。留学中、彼を担当しているバディでもある。日常会話程度の日本語と広東語、英語を解した。

二人一組で柔軟体操をしながら、

「そりゃあニホンのほうが異常なんだよ。夏の京都に滞在経験のあるオレのひいひいばあちゃんが、オレがまだ小さいころ、思い出を話してくれたよ。印象に残っているのは、カビ！——だそうだ。赤黒、黄色、緑、と。ニホンじゃ、カビがアニメーションになるほどなんだろう？」

母音を強調した英語で話してくれる。

「ふうん」

相槌をもらして、テッセンは、続けて友人がお手本として演じる型をまねした。

「カビとバイキンか。どっちも、まあ、たちが悪いところは一緒だもんな。たしかに、俺もごめんこうむるね」

「ごちゃごちゃうるさいぞ！ 留学生！」

「イエース、ソーリーイ」

師範の怒声に肩をすくめつつ、リーと笑いあったテッセンだが、もっとたちの悪いものが自分に近づいているとは、このときの彼は、思いもしていなかった。

平安学園高等部にも、多数の留学生が来ている。特筆すべきは一年生で、この年は、平安出身の生徒が特に少なかったため、クラスの過半数を留学生が占めていた。原因はもちろん、一年半前の事故によるものだ。さらにつけくわえると、彼らのクラスは、上と下の学年が2つの組にわけられているのと同じ、1つの組に、学年の全員がそろっていた。

また、この年は、一部のものにとっては、名前だけ知っていた生徒との初対面となった。中学のあいだ留学していた生徒が、帰国してきたためである。リョウヤとツキヨ、という二人の姉と弟か、兄と妹か――。年が同じで、まったく似ていない以上、やはり、彼らも義理のきょうだいであるのだが、その二人に、ちゃんと話しかけられたのは、リヒトは、その日はじめてだった。

「ちょっといいかな」

リョウヤがまずやってきた。前衛類？の生徒らしく、はりつめた大きな体をしている。

「あの子のことなんだけど」

「あの子――ああ、」

リョウヤが一瞬目配せをした先に、光る銀色を見つけて、リヒトは目をすがる。

「ミューね。……なに」

「連中がね――お前とあの子の関係を気にしている。どうかな」

さらに視線を送った先に、留学生たちがいた。癖のある金や亜麻色や赤い髪の彼らは、リョウヤと見るとにつこりと笑って手をあげた。リョウヤが手を振りかえす。そこへ、ツキヨがやってきた。

「女子からは、君に用事はないみたいだね」

二人は、そろってリヒトのわきに並ぶと、左右対称に分けた前髪を揺らして首をかしげた。

「それはまあ、そうだろうね」

リョウヤ自身がギンを気にしているわけではない、ということがわかって、多少、リヒトはほっとする。また、彼は、自分が目をひく容姿でも、これという特技の持ち主でもないことをじゅうぶん理解していた。

しかし、ああまた例のか、と思いながら黙ってあごに手を当てていると、

「で？ あの子とは、どういう？」

控えめに首をかしげたツキヨは、女子たちからの密命を帯びているな、とリヒトは見て取った。

「何度も言うとおり、友達だけどね」

彼も首をかしげながら言うのと、

「本当？ あんなに一緒にいるのに。選択の授業も一緒、休み時間も一緒、帰るのも一緒。気になる証言がぞくぞくなのだけれどもね」

「まあ、仲はいいかな。ミサビやテッセンやシルルと同じだよ」

「本当？」

リョウヤが背後をふりむいて何かを言った。すると、留学生――ジョヴァンニ、アーネスト、ヨンニの三人がゆっくりと近づいてくる。リョウヤの通訳をきくと、ジョヴァンニが小さく口笛を吹いた。彼は、空いていたリヒトの前の席に座ると、振り向きざまに顔を近づけて「ガールフレンドじゃない？」と首をかしげた。空と宇宙の境目の青い瞳が、好奇心をたたえている。

「本当？」

「本当だけど」

「じゃあ、いいのかな」

「何が」

「声をかけても、ってこと」

「かけたかったら、かけたらいい。自由だよ」

「そう？」

「そうさ」

彼女が相手にするかは別だけど、と小さく呟いたが、ジョヴァンニには聴こえなかったようだ。彼は、金髪を指にからませて離すしぐさを一度すると、す、と視線をすべらせる。そこでは、ミューが、文庫本を読んでいた。

「あんな子は、よそのゲッターでもお目にかかったことがない。美しい、美しい——としか言いようがない。それに、頭もいいし、いいところのお嬢さんだって？ それと、天涯孤独の君が特に親しいと——ミサビではなく、君と、と。どうにも、見た目も中身もつりあいが取れないのが、ひっかかるんだけどね」

「そのままひっかかってれば？」

「面白いひとだね、君は」

「そりゃどうも。褒め言葉だと受け取るよ。しかし、だよ……ジョヴァンニ。彼女は君の思い通りになる子じゃない、ということだけは言っておく。怖いお兄さんが後ろについているしね」

「怖いオニイサン。それが君？」

「だったらいいと思う、とは、リヒトは言わなかった。」

「——見ればきっと、わかる」

それはもちろん、シンのことである。不思議そうに首をかしげたジョヴァンニをよそ目に、リヒトは軽いため息をついた。

誰も知らないが、リヒトはこの春、留学前のシンに呼び出され、忠告されていた。内容は、もちろん、ミューについてだ。退院後、徐々に接近しつつあった二人を、この、義理の兄が快く思っていない、ということのリヒトは感じていたが、あらためて思い知ったかたちである。開口一番言われた言葉は「馬鹿な真似はよしてくれよ」であった。松岡邸の広い一室で、荷造りを待つ小物や刀が、寝台に並べられていた。

「あの子は、サンプルなぞよりもっと、この先、重くなる存在だ」
凄みを増した美貌の男が、本気の声で告げたので、リヒトは黙ってうなずかざるをえなかった。彼はなぜか、病院で、リヒトがギンにした約束のことを知っていた。

「あれはまだ教育の途中だ。精神面のもろさが目立つので、そこをうまく君がなんとかして、一人前にしてくれたら、と思う。だが、やりすぎは困る。下手に未来に希望を持たせるのも、あやまちを犯すこともだ。なにしろ、あの容姿だからね。僕ら変化したものは、人が生身に備えているような質感を捨てざるをえないし、人工のハクに入っている以上、ある程度の肉体の汚れや、個性的な醜さなどと無縁になる。救いようなない不細工、というのがここにいないということは、君も気付いているだろう」

「はあ、まあ……」

「僕にしても、自慢ではなく、人並み以上の容姿であるといえるだろう。しかし、あれは、そんなものの規格からも外れている。いつだったか、さる高官は、あれを、この世のセラフィムと称したよ。だから僕は、とても心配しているのだ」

にらまれて、リヒトは背に汗をかいだ。しかし、

「そんなに心配なら、留学をおやめになっては？」

精一杯胸をはって嫌味を言うと、

「悪いが、できの悪い義理の妹のために、自分の将来を投げられないのですね」

彼は肩をすくめた。

「じゃあ、一つだけ教えてください。貴方が必要とする、彼女の素質、とは何ですか」

その瞬間、シンの表情が固まった。すぐに元通りになったが、粒子をすさまじい速さで動かしながら“見る”ことに全力を注いぐと――彼の、義妹にかけるなみなみならない思いが伝わってきた。

「あれは兵器になりかねない」

シンは低く言った。

「兵器？」

「いろいろなものを壊す。取り扱いに、細心の注意が必要な類の、人間であり、魂であり、力だ。君には、そんな心配は無い。ただの駒だからね、世界にとっては。しかし、ミューは違う――あれは、

本当に、突然変異体ミュータントのようなものでね」

絶対に傷つけたり失ったりしてはいけない——とシンは続けた言
い、

「だが、君が、あくまであれにまわりつくトラブルの避雷針にな
る、というのなら、幼馴染として仲良くするのも大目にみよう」

最後に、譲歩した。

要するに、ボディガードとしてなら、仲良くしてもかまわない、
ということだ。

——ずいぶんまだるっこしい言い方をする。これが金持ちのやり
かたかあ。

貧乏人根性を覚えたりヒトだったが、本人いわく「自分を守って
くれた」「とても尊敬できる」と言わしめた幼馴染の兄である
。誓約書までは書かないにしても、「けして馬鹿なこととはしません
と約束しなければならなかった。それに、今、この状況になってみ
ると、自分があやまちを犯すかどうかはさておき、彼女が並外れて
美しいから、という部分は、やはり肝に銘じておく必要があるよう
に感じる。

ギンの周囲は、まったく、トラブルの火種で満ちていた。

留学生でなくとも、彼女を見つめる男たちの視線の多く熱いこと
といったら、毎日、呆れるばかりだった。

シンが留学してからというものの、ほとんど毎日、下駄箱の前で固
まるギンの途方に暮れた顔。頻繁に送られてくる、差出人不明の花
や菓子。通り過ぎるものはすべて、男だけでなく同性でも彼女を振
り向いた。きけば、案の定、同性からも言い寄られたことがあると
いう。花街の近くでは、これが、熱烈なスカウトに変わる。兄不在
の最初の一週間は、授業中以外、一秒たりとも目を離しておけな
かった。

授業終了の鐘が鳴る。ジョヴァンニより先に立ち上がり、リヒト
はミューに「行こう」と声をかけた。

「それとも——ミュー、彼らが話があるみたいだけど」

ジョヴァンニたちをさすと、少女は顔をしかめた。周囲にいるすべてのものに、あからさまに「いやだ」というようなものだった。すばやく文庫本をしまうと、立ち上がって身支度を整える。彼女は武道芸術のどの部活にも入っていないので、放課後はフリーだ。いつも、リヒトの部活についてくるか、ミサビが今年立ち上げた、食餌研究部という、要するに調理部だが、そちらで料理や、留学する前はマチコに裁縫を習っていた。

「お先に失礼いたします。ごきげんよう」

形だけは穏やかに、ミューはお辞儀をする。やれやれ、と、リヒトも、鞆を持って外に出た。

「ちっ」

リョウヤは、聞こえてきた舌打ちに、ぎょつとしてジョヴァンニを見た。嫉妬、というには強すぎる炎が、彼らの淡い瞳に輝いていた。

＊

弓道部の顧問であるシュウは、リヒトから留学生たちの話を聞くと、おかしそうに笑った。

「笑いごとじゃないですよ。毎日、毎日……それに、あの毛唐の連中まで加わるなんて、思ってもみませんでした」

「毛唐！ 言いますねえ、君も。立派に、毛唐の国の血をひいているのに」

「何代前の話ですか。俺は最初から日本国籍でした」

毛唐、とは、外国人をさす差別用語である。しかし、現世ではその意味が失われて久しく、ここでは、軽い冗談で使われる。実戦用の弓と和弓を使い分けながら、リヒトは、手にはめたカケの感触を確かめる。

背後では、文机にむかって、ミューが暇そうにノートを広げている。

る。彼が部活をしているあいだ、ここで宿題をするのが日課なのだ。「力が入ってるよ。違う——力でひかない。震えるのはそのせいだ。弓をひくのに力はいらない。骨だ。骨でひく」

「はい」

「スエタケ！ 指導を」

「はい」

シュウは、高等部でも相変わらずの昼行灯ぶりを発揮していたが、今年から、正式にソジ粒子操作実践応用の講師として採用されたので、多少、顔つきが厳しくなっていた。カエデ亡き後、リヒトのよき相談相手でもある。いつか市長から言われたシュウの「含むところ」が気にならないではなかったが、今のところ、全面的に信頼して、なんでも話すようになっていた。

休憩の合間に、彼は「そういえば、テッセンから聞いたんですけど」と、ふと、気になっていたことを口にする。

「最近、現世とゲットーは危ないんでしょうか？」

「ああ。あの発表ね」

彼が呟くと、そばで竹筒に口をつけていたスエタケも顔をあげた。

「重大発表、でしたっけ。もうすぐですよね」

「うん。人間側の新兵器らしいねえ」

彼は時計を見た。このところ、世間の話題はそれでもちきりだった。ここ二、三日のいつか、といわれていて、まだ速報は入っていない。準軍属である教師たちの焦燥に、生徒も浮かれ気味である。ジョヴァンニたちの、突然のギンへのアプローチも、ある意味では、浮き足立った雰囲気の変動、と思えなくもなかった。

ゲットーじゅうが、六月半ばのこの時期——雨と雲が空を埋める前の、繊細な一週間に怯えるようだった。

リヒト自身も、そわそわしている。しかし、江戸や明治や大正や昭和の町並みのなかで、外の現実世界とかけ離れた生活をしているので、人間側の兵器といっても、どこか遠い場所のことのように聞こえる。身に迫ってこないのだ。

「兵器って――」

「どんなふうでしょう？」

「中露（中国とロシア）の共同開発だってね。それだけでじゅうぶん、穏やかじゃない。あちらさん、今回はなかなか強気に出て、歴史を変える武力、とか打ち上げていただけでも――」

そのとき、鐘が鳴った。時間外の鐘で、連続して鳴り響くのが、時報とは違う。いよいよかな、と、いつも、のんきらしいシユウは、やりのんびりと呟く。彼もまた、腑におちない顔をしていたが、教師らしく顔をひきしめて道場の中に入ると、大きなラジオを持ち出してきた。

はつきりいって、彼らはたかをくくっていた。

先のアフリカでの衝突も、人間側は、結局何もできなかったのがある。

ところが、その日は違った。

官界に広がった衝撃を、何と表現していいか、とっさには彼女にはわからなかった。彼女――藤原堇は、新聞社に勤め、いつもはマテ研、ときどき政府の両方に張り付いている、うら若い美人（自分びいきを五割増しにすれば、そう呼べなくもないと思う）記者である。年は二十歳過ぎ、ぼっそり首筋で切りそろえられた男勝りの断髪と、生々しい皮膚の様子が、人間である、ということを現している。

その時刻、堇は、ゲッターには十数台しかないといわれるテレビモニターに釘付けになりながら、ざわめく同僚たちの緊張と、つばを飲み込む音を、遠くに聞いていた。

政府内の記者クラブである。他の新聞社の部屋からも、あわたたしい動きが伝わってきた。彼女のまわりでも、足の速い同僚の数人が、ばたばたと羽織やジャケットに袖を通し、大きなボストンバッグを抱えて飛び出していく。彼女は電話番号を任されていたので、その場を動くこともできず、ただじっとモニターに見入った。

「どこが渡した」

深刻な表情で腕組みし、呟いたのは、上司である。いつもは温厚な――変化した人間らしく、きめ細かな首の肌を見せた男だが、その横顔からは、怒りと苦渋が感じられた。

「なんだこれは」

彼がそういうのも無理はなかった。

公開されたテスト画像――

「ペトルーシユカ」

「ペトルーシユカ？」

堇は首をかしげる。

「愛称だそうだ」

吐き捨てるように、ロシア語に堪能な男が答えた。聞き覚えのある名前である。すぐに董は、いつか父親に連れられて行った演奏会のことを思い出した。

ストラヴィンスキーのバレエ音楽。複雑なリズムと旋律にのせて、人形の目覚めと恋と破滅が繰り広げられる。ペトルーシユカは、人間の情熱と苦悩を持つ、主人公の、魔法をかけられた操り人形の名前である。

「操り人形……」

しかし、ペトルーシユカ、と呼ばれ、目の前の画面で縦横無尽に動き回るそれは、夢や叙情のかけらもなかった。

二メートル近い体幹に、太い手足が四本。その体には無数の銃眼がついていた。そこから飛び出した弾丸が、五百メートル先、一センチ四方の的を、正確に銃で打ち抜いた。さらに、その四本の手足にはそれぞれ刃物や銃を持ち、命令に応じて、人間の標本の首や急所を、次々に切り、突き、えぐる。滑らかで無駄の無い動きからも、最新型AIを搭載している、という言葉に間違いはないだろう。しかし、その、ベースとなっているのはまさしく――

「俺たちの、ハクだ」

上司は、椅子に座り込んでモニターを見つめ続ける。

「非人道的ってなあ、このことを言うんだよ！」

英語のナレーションを聞き取って、董も、全身の力がぬけた。なんとか椅子の上に着地したものの、体がふわふわと浮き上がるような感覚は消えない。

『ペトルーシユカ』は、すべての武器を体内に収納すると、くると振り向いて、その顔や体を視聴者に披露した。均整の取れた、生々しく艶のある体は、すさまじい熱を発するのか、汗をかいているようにも見える。そのせいで余計にリアルな皮膚は、柔らかそうに見えたが、先ほどの映像で、千五百度の熱にも、氷点下にも、戦車で轢かれても無傷である、という頑丈さは周知だった。その後、映像は途切れる。しばらくして画面に現れたペトルーシユカには、

豪華な衣装を着せられて、椅子におとなしく座っていた。服を着ると、本当に、羽化転生した人々の外見に似ていた。さらに、ペトルーシユカには仲間もいた。チャイナドレスをまとった、アジア人の容貌をした少女と、褐色の肌に、毛皮の外套の、筋骨隆々たる大男だ。

「こういうのがどんどん増えるんだろうな」

「大西洋連合も、ほかも、追従しないわけがない。次は何だろう。ピノキオか？ ル・プペ（お人形）か？」

「人間様は、ついに、自分たち自身で戦うのをやめるつもりだな。映画みたいだなあ。機械同士の戦争、か」

「軍隊までオートメイションとなると、金のない貧困層の子弟の就職先がなくなるなあ。なにしろ、軍隊ってやつは、兵隊になれば衣食住がただだ。かえって犯罪が増えそうだな」

「――蓬萊のマテ研から、実験用のハクが紛失したって事件があったな」

ぽつりと誰かが言った。それぞれ喋っていたひとびとは、いっせいに顔を見合わせる。

「こいつに流れてたってことか？」

「――かもしれん。医療用に、部品だけは現世へ提供する場合があるが――まるまる、一体は渡せないはずだ。それを、とうとう、やりやがった。アフリカの件があったから、今、公開したんだろう。たいした牽制だよ。この性能は、明らかに、対人用じゃないからな。対、俺たちだよ。実験ではいかにもに見せているが、こいつらにもし、粒子を操作する力でも備わっていてみる」

「あ、とうとう言ったな。せっかく考えないようにしてたのに」

「ジャーナリストのくせに目を背けるなよ」

「うるさい、仕方ないだろ。俺は悲しいよ――本当に。馬鹿みたいだ……こいつらと、俺たちが戦う日がくるなんて、考えたくもないよ」

「世界が原始的になっていく気がするな」

静かに言ったのは、最年長の上司だった。

「原始的……ですか？」

堇の斜め前に座る、ロシア語の男が首をかしげる。堇も不思議だった。機械人形の兵士が戦い、生身の人間の血が一滴も流れなくなる、というのが、どこか未来的に思えたのだ。しかし、上司は首を振った。

「ミサイルも戦車も核も、もう意味をなさないとわかったんだろう。武器、というものの限界が、とうとう訪れたんだ。とすると、最後は初心に帰るしかない。肉体と肉体、一対一の戦い。これは、そうだよ。俺たちと、フェアにやろうぜ、って、あいつらは言ってるんだ。同じ体で、同じ能力を駆使して——いや、同じ、かどうかはまだわからんが」

「たちの悪い冗談ですぜ。ゲッターに渡されている兵器といったら、昔っからの刀や、古臭い型落ちの銃や、そんなもんだだけだ。核だって戦車だって持ってない。何にもしてないんだ。なのに、なんで、こんなもの作って見せびらかされなきゃならん！ こいつらともし戦になったら、戦わされる連中はなんて思う？ 俺たち自身と戦うのかって思うぜ……こいつらに、銃や刀を向けられるか？ うちにだって、有事のとき徴収されるやつだっているのに」

彼の怒りはもっともだった。

画面に映っていたのは、彼らと生き写しの——まるで、ドッペルゲンガー。

鏡の中の自分と戦えるか？

堇は唇を噛んだ。肩身が狭すぎて頬が熱くなる。

「やりきれんだろうな。もうすでに、やる気を殺ぐって部分では、大成功だよ。これに街を包囲されたら、戦う前から絶望的な気分になること、間違いないんだ」

堇はそこでうつむいてしまった。人間であることが申し訳なくなる——すると、ふと、隣の席の同僚が「お前、今日は歩いて帰るなよ。車呼んでもらえ」と、心配げに囁いた。

「え……?」

「念のためだよ。平安の人間にゃあ、間違っても変な気起こすやつなんかないだろうが、万一ってことがある。もしくは――たしか、弟がいたろう。多少無理を言っても、迎えに来てもらえ」

そんなことまで考えなくちゃならないのか、と堇は思ったが、つくづく甘すぎる自分に愕然としながら、なんとか首を振った。

「弟は――今、留学しております」

「そうか。そうだったな」

同僚は、難しい顔でうなづく。

あの子は大丈夫かしら――ふと、堇の脳裏には、弟の姿がよぎった。胎児のときに変化する、という稀有な状態で生まれてきた彼女の末弟は、今、たった一人で、蓬萊ゲッターにいる。そうでなくても、彼は父親と衝突して、連絡が途絶えがちだ。もし何かあったら、亡くなった母に申し訳がたたない、と、堇は、次々に鳴りはじめた電話に應對しながら、

「キヤップ、さっきの話――蓬萊から盗まれたハクが、ってやつですけど――もし本当だったら、蓬萊やよそでは、どう受け止めるでしょうか。ハクを渡したのが、もし、そこだと本当にわかったら――問題になりますよね」

堇が、上司の席へと顔をむけると、

「今ごろ、あっちの公安が出てるんじゃないかな。ゲッター同士で制裁は、ないと思うがなあ」

と、上司は、窓をあけて、使い魔を迎え入れながら言った。

「市長の記者会見、1900から」

「他ゲッターへのパス申請を――」

「往来が途絶えたりしないでしょうか」

騒音の合間に、上司に尋ねる。

「どうだろう」

鳥たちの足からメモを外すのに忙しい上司の頭の中は、すでに、記事のことで埋まっているようだった。

応対に口を動かす輩は、ふと、窓から入り込んできたモンシロチヨウの群れが、彼女の机の上にいつせいに止まったのに目を見開く。彼らは、羽から落ちた燐粉を、細い足でかき乱した。

「あ——ありがとう……」

オムカエニマイリマス、という文字列が読み取れた。輩は、机のひきだしから角砂糖を置き、湯飲み茶碗の水を落とす。ほろりと崩れた砂糖水に蝶は群がり、しばらくすると、いつせいに飛び立って消えた。

「サヨラちゃん」

＊

一方、蓬萊市。その日は、彼がこの地に留学して、ちょうど二週間めにあたる日だった。テッセンは、彼には珍しく、やや疲れを感じながら、中庭の道を急いでいた。すでに夕暮れで、次が、最後のレッスンだった。

とちゅう、妙なサイレンが鳴り響いたのが気にはなったものの、少林寺のレッスンはそのまま続行された。そのため、彼はまだ、ゲットーじゅうが受けた衝撃を知らない。

「疲れるもんだな」

カリキュラムは、おおよそ平安学園と変わらなかったが、彼を戸惑わせたのは、やはり、風習の違いであった。それはまるで、はじめて平安学園に来たりヒトのような気分である。

とはいえ、それは、馴染めないかもしれないという恐れではない。あまりにもフランクすぎる、蓬萊市の学生たちの態度が、この、ある意味では平安市の純粹培養——江戸から続く旧日本の気風を大いに反映した生活をしてきた——彼を、最初の恐慌に陥れつつあったのだ。建物も、行きかう人の様子も、いちいち、彼の目をくらませ

た。あの東京とも明らかに違う、別の異様な空気。

最初の一週間、彼は呆けたように、そのなかを必死で泳いだ。そのあとは、異邦人につきものの、異国を踏んだ興奮から冷めたときに忍び寄る疲労と倦怠感が、どっと襲ってくる時期に突入していた。ことに、二日前から、彼に異様に接近してきたひとりの男が、その不安をあおっている。

——ああ、リヒト。お前の気持ちがよくわかる。

それに、ミサビの作るおにぎりはいまにあったなあ……

空腹をおぼえつつ先を急いでいると、いやな予感が脳裏をかすめる。それを見計らったかのように、

「ハイ！ テッセン！」

「またお前か」

独特の甲高い声に、うんざりと振り返ると、その男、スチュアート・チャンが駆け寄ってくる場所だった。彼は、テッセンに追いつくと、彼の肩に手をおき、その感触をたしかめるようにして、眼鏡の奥の目を光らせる。

「——頑丈だね」

「だからなんだよ」

とても、三十近いように見えない男の手を肩から振り払って、テッセンはずんずんと歩く。

ふだんならそこであきらめるのだが、今日のスチュアートは違った。

「君は武術を学びに来たんだよね？」

「そう見えないか？」

テッセンは、いつもの道着姿である。これから、太極拳の指導を受けにいくところだった。隣に並びながら、スチュアートは、学者めいた表情で（事実学者なのだが）まじめに告げる。

「君は、あのイエルシャロムの事故に遭ったんだよね？ ちょっと、調べたんだ」

「だからなんだよ。そのときの話なら、なにも、話すことなんか

いぞ」

そもそも、彼が話しかけてきたのは、あの事故について聞きたいからだ。テッセンは思っていたので、さらにつっけんどんに「帰れよ、話すことは無い」と手をふる。

「お前はブンヤか？　でなくても、しつこい男は、俺は好かん」

「わかってるよ。口外できないってこと、知ってる。で、それでさ、君は、武術を学びに来たんだよね」

「だから……。いい加減にしろ。なにがいたいんだ？」

テッセンは立ち止まって、スチュアートをいらいらとにらみつけた。

「何度同じことを聞くんだ？」

君は強い、君は武術を学びに来たの、強いということにどれだけ価値をおくのか。それは、初対面るときから繰り返されてきた質問だった。

「今日、事務で、君がショートステイで、ここから帰ったあとまた戻ってくるかどうか、わからないって聞いたんだ。だから」

「だから忙しいってのは、見てわからねえか。俺には時間がねえんだよ。早くどこかにいっちゃまえ、このやろう」

短い期間で、太極拳、少林寺、棒術など、アジアの武術をすべて学ぶつもりである。同級生にはしごく穏やかに、平安学園の評判をおとさぬように気をつけていたテッセンだが、スチュアートに対しては、口調がぞんざいになった。マテ研の職員らしいということは聞いていたが、ならばなおさら、この男に付きまとわれる筋合いはない。これっきりにしてくれ、というとしたとき、とうとうこの日、スチュアートは、意外な行動にでた。

「おい——おい！」

突然、テッセンは腕をつかまれ、そのまま、ずんずんとひっぱられる。広大な敷地の隅にある花壇のところまで来ると、スチュアートはようやく腕を放した。細いのに意外にも力強かった、とテッセンが呆然としていると「私だって一応、蓬萊でシヨウリンジをやっ

てたよ」と彼は弁解し、あたりを見渡して、ずりおちた眼鏡をひきあげた。

至れり尽くせりのハクを使用しても、まれに、視力が低下するものがある。ミサオのような、大人に見せるための伊達眼鏡ではなく、それが本物の眼鏡であることに、テッセンは今、初めて気付く。

ふと、妙な感じを覚えた。

マテ研の職員がなぜここまでして自分につきまとうのか、その意図は何なのか――

「一度だけ言うよ」

「……なんだよ」

「君は頑丈だ。体力がある。武術に意欲がある生徒だ。口が堅い」

「だから？」

「強い、ということに対して興味があるはずだ。だよね」

「まあな」

改めてたしかめるまでもない。彼は、自分の体の頑健さも、武術向きであることも重々承知している。力、というものを頼りにすることを、公言してはばからない。しかし、それがなぜ、蓬萊ゲッターの、このマテ研の研究者にとって重要なのか理解できない。

早くしろ、とどなりそうになったとき、スチュアートは勢い込んで、

「魔法に、興味がないかい？」

「はーあ？」

「魔法というものが現実にあつたら、素敵だと思わないかい？」

きらきら光る目でテッセンを見る。よく言葉の意味を吟味するのに時間がかかった。そして、理解した瞬間、テッセンを襲ったのは、途方も無いばかりさだった。蓬萊ゲッターという場所は、よくよく、平安市とはまるで違う。『自由の国のアジア』の懐の深さに、我知らず、イツアファンタジー、といううめきを、彼は漏らした。だまってきびすを返そうとすると、スチュアートがあせったよう

に「待ってくれ、待ってくれ」と、つたない日本語で引き止める。驚いて振り向くと「君のために覚えた」と彼はにやりと笑った。

「話を聞いてくれ。頼む。もう君しかないんだ。みんな、私の話をまじめに聞かない。私の仲間だけだ。でも、仲間はみんな解散させられた。チームはつぶされた。あの、くそいまましい、技術は金で買えると思ってるジャーナリストあがりの所長なんぞに——テッセン——そうだ！ 魔法、魔法という言い方が悪いか？ 浮ついて聴こえる？ だったら、そう——粒子の、まったく新しい活用方法だ」

「粒子の？」

「最近、マテ研各支部では、その技術を確立しようと躍起になっているんだ。だけど、ここで蓬萊が真っ先に抜けるとは、ありえない。私が一番進んでるんだ。進んでたんだ。あともう少しで——なのに、つぶされた。仲間は、それぞれ、他の支部に移ったりしている。私の技術を持って。彼らはいまやライバルだ——このままでは先を越される。その前に——いまあきらめるわけにはいかないんだ。頼む、協力してくれ」

「それで何で俺に声をかける」

「あのニュース聞いてないの」

そこで、スチュアートは不思議そうに首をかしげた。

「あのニュース？」

「聞いたら、君だって、そんなふうにしてはいられないと思うけどね」

そのとき、スチュアートの顔に現れたのは、敬虔ともいべき表情だった。

「そう、聞いてくれたまえ。このままでは、ゲッターは、人間たちにつぶされるよ」

「はあ？」

テッセンが抱いた感慨は、何を馬鹿なことを、である。彼はなにしろ、自分たちが人間よりすぐれている、と信じて疑わない人物だ

った。アフリカの件も念頭にある。核も戦車もミサイルもないが、ゲッターの優位性は、彼の中で揺らがなかった。時間を操ることができれば、変化した強い肉体があれば、神霊を許容する柔軟な精神があれば。まず、人間などに負けることはないはずだ。

スチュアートはしかし、彼がそう言うのと、静かに笑った。

「いつまでも人間が人間のままでいると思ったら大間違いだよ。彼らから僕らが生まれたように。彼らは僕らから、新たなものを生み出す。粒子が、霊魂の世界をこの世に結び付けてから――すでに世界は、ファンタジーと同化をはじめているのだ」

ナウ、ディスワールドチェンジドイントゥファンタジー、とスチュアートは呟いた。

「君が、馬鹿にしようと、しまいと、そうなんだよ」

「そんなことは……」

「いや、している。君は、馬鹿にしてるよ。科学を。そのおかげで、君のハクと魂はこの世に存在しているのに。君に、その強さを与え、健康な精神を与えたのが私たちだというのに、君はその事実を無視している。まあ、無視してくれてかまわない。そのくらい些細なことだと思えるほど、私たちの技術が、君の生活になくてはならないものとして在る、ということなのだから。よくいえば、とても現実的だ。しかし――聞きたまえ。脳で科学を追う時代はとうに終わった。いまや、魂で科学を追う時代だ。科学は心霊と魔的になった。魔性なるものになった。そして、それらが一体となって向かうこれからの未来、それは魔術――そして、魔法だ」

そう言い切って、うつむきがちにテッセンを見る眼鏡の奥の目に、なぜか、彼はぞっとした。けして大きくはないスチュアートの体が、夕日の中で何倍にも膨らんで、存在を大きくしたような錯覚に陥る。茜さす小道で、テッセンは、これから自分がどこへ行くこうとしていたのか、すっかり忘れていた。

スチュアートは手をさしのべた。

「悪いようにはしない。君に、新しい力を人類が手にする、その最

前線を見てもらいたい。強さを追い求めて異国にまでやってきた少年には、たまらない申し出ではないかい？　もしもそれに危険が伴うとしても、だ。かえって腕が鳴るといふもの。サムライの国から来た君なら、難なく切り抜けてくれるんじゃないか、と、私はとても期待している。だから、再三再四、声をかけた。君ならばやってくれるだろうと――私がスカウトするだけの価値があると思ってね。それに、もし、途中で離脱したいというのならそれもかまわない。わざわざおとのうた客人である君に、蓬萊の土産話の一つ、二つ差し上げるのに、やぶさかではないんだから」

「途中で離脱？」

テッセンは、ひくりと眉をあげた。

「俺が？」

「ああ――君ならば、そんなことは考えないだろうとは思うがね。他の、候補者たちと違って」

その言葉は、テッセンが普段押さえつけている好奇心と、虚栄心をくすぐった。

どうやら、少年の心が動いた、と見て取って、スチュアートは笑みを隠す。彼にとって、テッセンは、これまで熾烈なポスト争いや順位争いを繰り広げてきた相手とは、くらべものにならない相手だった。

――だいたい、こういう腕力にものを言わせるタイプは、持ち上げて落として、持ち上げればいい。

そう思った次の瞬間には、スチュアートの頭はもう、別のことを考えている。

「夜、ここで」

彼が差し出した名刺の裏には、馴染みのカフェの住所が書かれている。

テッセンはそれを、黙って、おとなしく受け取った。

あるいは、受け取ってしまったのかもしれない。結局、彼は、こういった押しの強い人物には、本当はとても弱かった。

外は、今にも降り出しそうだ。

中庭で、紫陽花の手入れをする園芸部の部員は、頭に笠をかぶって作業をしている。脚絆に手甲をはめたその姿が、ミサビには、戦国時代の足軽たちを思い出させた。半円祠堂のまわりでは、色づきかけた薔薇が、可憐なつぼみをつけている。天候に左右される彼らの仕事に親しみを感じて、しばらく見ていたが、隣にいた少女の声で我にかえる。

手を柔らかく押し返す、弾力のある塊を成型して、型におさめると、部屋の隅の、一段低くなった土間に下りた。

平安学園高等部の調理室には、古いかまどがある。

煮炊きをするたびに熱い風に吹かれてめくれ上がる神札を手でおさえつけて、ミサビは、はぜる火の粉にもひるまず、火の加減を見る。留学生の一人が、熱心にメモをとりながら、一緒になってのぞきこんだ。

今日のかまどは石窯になっている。遠火にかけられた鉄板の上では、小麦粉と塩と水と酵母の混合物が、ふくらみはじめたところだった。蓋をしめてしばらくすると、香ばしい匂いがたちはじめる。

「電気オーブンがなかった時代を思い出します。アジアの台所は、土と鉄ですね。ヨーロッパともまた、違います」

「そうだねえ。うちは、電気の供給が満足じゃないから、煮炊きの基本は、いまだにかまどだね」

彼のそばについているのは、地中海ゲットーからの女子留学生で、名前を、ベアトリーチェ・カタクラと言った。後衛類？に属し、補給について学んでいるが、本当に興味があって学びたかったのは、各国の郷土料理だという。軍人志望ではなかったのだが、家族の仕送りなしで進学を希望する、となればこの道しかなく、やむをえず

高等部まできてしまった。父方に日本の血が混じっているのに、平安に来るのを楽しみにしていた、と、来校初日からあけすけによく喋り、語学が堪能なミサビにくつついて、熱心に質問をくりだした。

試食を終えて、全員で片づけをし、調理室の鍵を顧問に返却して、その日の部活は終わった。

「ずいぶん遅くなってしまったね」

途中、彼らもやはり、ラジオの緊急放送を聞いていた。そのぶんの時間がおして、学校を出る頃には、ほぼ、日が暮れかけていた。寮に向かう道すがら、どこかに立ち寄ることもできない時間だ。

ミサビは、ペトルーシカについて誰かと話をしたかったが、食餌研究部の部員は、そういったことに興味の無い生徒が多い。

「お先に」と、ファサードで部員たちの群れを追い抜き、暗くなりはじめた道でひとり足を速めていると、後ろから足音がする。ベアトリーチェだった。

彼女は、竹林の一本坂道でミサビに追いついた。一気に距離を縮めると、彼の横に並ぶ。

「どうかした？」

次のメニューについてならまだ未定だよ、と言おうとしたとき、「少し、話があったのです」

ベアトリーチェは、唇にひとさし指をあてた。内緒話のジェスチュア。それが、ずいぶん魅力的だったので、がらにもなくどきりとしながら、ミサビは首をかしげる。

「僕に？」

告白はないだろう、と、その程度の客観性は持っている。では、なぜ——学業上の相談なら、特に内緒にしくなくても、いつでも受け付けている。

「何か、クラスメイトと問題があった？」

「Si——ミサビさん、あの子と仲いい、違います？」

「あの子？」

「ミューさんと。それから、あの黒い髪、類？の男の子も」

「ああ」

リヒトね、とミサビがうなずくと、彼女は「そう」と顔をほころばせ、

「気をつけてほしいです」

早口でそう言った。

「え？」

ミサビは立ち止まりかけたが、ベアトリーチェは「普通にしてください」と、茶色がちの緑の目を、そっと左右にすべらせた。警戒している、とわかって、ミサビは言うとおりにする。あたりには、彼ら以外の気配はない。通学路となっている、真ん中にゆるい坂となった竹林は静かだった。ベアトリーチェはほっと息を吐く。

「他の人に聞かれないです」

普通の相談ではない、と見て取って、ミサビも表情を引き締めてうなずく。

「リヒトさんと貴方、親しい。彼に伝えてください。ミューさんのこと、目、離さないでって。うちのクラスの、私やアブドラたちと違う、あの、ジョヴァンニたち。あの子達、ちよっと、変わってます。彼ら、同じよその学校から来ているけど、目的、だいぶ違う。そんな気、する。あの子たち、ミューさんと近づきたいの、別の理由あります」

「ええと……」

ミサビも、放課後、彼らがミューに接近しようとしていた現場を見ている。それが、純粹に恋愛上のことではないと聞いて、驚いた。「どういうこと？」

「私もよくわからない。ええと……でも、たぶんあれ。そう——貴方たち、事故にあった。たぶん、それ」

「ああ——ひょっとして」

「ええ、そうです——あの噂……サンプル？」

最後の四文字だけ、風の音とほとんど同じヴォリュームになった。

「そう」

そうだったのか――

ようやく合点がいった。リョウヤがしきりと首をかしげていたので、なんとなくひっかかりを覚えていた。

「スパイ、ということだね」

ベアトリーチェの返事は、しかし、あいまいなものだった。

「諜報課の生徒は、授業とってる、そのこと、言わない。私にも、本当はよくわからないけど」

「いや、じゅうぶんだよ」

表向きは単なる留学生だが、実は、ということは、ここではよくあった。ジョヴァンニらの目的が、事故の真相や、サンプルの存在について探ることだったとしても、驚く理由はない。彼らは、それぞれ、地中海、イース、ロンディニウムの出身で、そこは、ゲットー連合の首脳にあたる。そこからの留学生といえは聞こえはいいが、そのなかに、純粋に学業目的ではない何かが混じっていてもおかしくない。

まして高等部ともなれば、彼らは半分、大人の領域に片足をつっこんでいた。

しかし、ベアトリーチェは、ジョヴァンニと同じ地中海の出身だ。君が教えてくれたのはなぜ、とミサビが尋ねると、少女は少し考えて、

「友達だったから」

「友達？」

「はい。彼から手紙、もらいました。貴方のこと、書いてあった。私、フリオの友達だったです。覚えてますか。フリオ・カーデ」

「フリオ――フリオ。もちろん、よく、」

あの事故で亡くなった留学生のひとり。同じく、地中海ゲットーの出身者。突然、胸の中を風が吹き抜けていった感覚をおぼえながら、「すまなかったね」と思わず彼が謝ると、ベアトリーチェは「いえ」と長いまつげを伏せ、首をふる。

「いいえ。そのこと、私、気にしてない。不幸な事故と思います。貴方、とても彼によくしてくれたときいた。私、感謝しています。でも、そうでない人もいる。彼ら——ジョヴァンニ、フリオとそんなに親しくなかった。でも、あの事故が平安の陰謀だといって、敵討ちする、思っているひともいます。だから、気をつけて。彼ら、ミューさん気にしてます。あの銀髪のひと、あまりに綺麗すぎる。他と違う。だから彼ら、サンプルが彼女だと疑ってる。あのひと、そのくらいすごいです。なんというか……まるで——」

ベアトリーチェは、同性として複雑でもあるけれど、というようなことをイタリア語で呟き、その後、雨の降り出しそうな暗い空を見上げて、

「天使みたい。そう言ってます。私たち——よそからきたひとたち」と言った。

なるほど、天使か、とミサビは内心で、第三者からいわれて気付いた発見をかみしめる。

紫陽花の生い茂る小道を抜けた。

——彼女が、そうだと……？

ミューがあの手事故の当事者ではないことを、ジョヴァンニたちはとくに知っているはずだ。もともと一つ上の学年にいたことは有名だし、あのときの入院には、別の理由がつけられている。なのに、なぜ、ミューをサンプルだと思っているのだろうか。綺麗だからという理由は、あまりに単純すぎるのでは？

どこで誤解したのだろう、とミサビは考えたが、容易に結論は出ない。

女子寮の前に来ると、ベアトリーチェは「じゃあ」とほっとしたように笑って、門の中に入っていた。ミサビも、反対側の通りにある男子寄宿舎へ入る。在籍板に在寮札を掛け、早足で部屋に向かった。

「ただいま」

部屋は、窓が全開にされ、湿度とつめたい風が頬にふきつけた。

屏風の向こうで「おかえり」と、ものうい声があがった。

「雨、降らなかったか？」

「まだだよ。なんとか」

着替えて、屏風の向こうに「いい」と声をかけると、「いいよ」と返ってくる。風呂敷包みを手に入り込むと、シルルは、ベッドの上に座って、ぼんやりと宙を見ている。そばには、書きかけのノート——今日、休んだぶんの課題をこなしていたのだ。

「調子は」

「だいぶいい。出席日数が、やばいな。明日はちゃんと行くから」頭をかきながらそう言った。のぼしたままの、癖のある髪がくしゃくしゃになっている。ミサビを見ると、緩慢な動作で髪と服をなおしはじめた。

「そう。ご飯は？ 食べられる？ 部活でパンを焼いたから、持ってきたよ。夕食前だけど、いいでしょう？ お茶いれるよ」

ポットを机の上に探したミサビは、そこに、綺麗な菓子の包みを見つける。

「これは？」

「なんとかってやつ。留学生の。お隣にいる——そいつが、郷里のなんとかって。もらったよ、お前のぶんも」

「そう。ありがとう」

ヨンニか、とミサビは納得する。北欧出身の、細身の少年。ジョヴァンニと仲がいい。

彼もか——

ひっかかったが、病床にある友人に、余計な心配をさせたくなかったので、シルルには、黙っていることに決めた。

シルルは、窓のほうを見ている。血の気のない、能面のような表情だ。

「ラジオ、聞いた？」

ミサビは、お茶のカップを手渡す。シルルはパンを食べ始めていた。こうして、ものを食べているところを見るのは久しぶりだ。「

うまい」と呟いて、微笑をみせたシルルにほっとしながら、自分も湯呑みに口をつける。

「聞いた。大変……なんだよな。こうしてるぶんには、とても、現実とは思えないが」

「そうだね。どうするのかな、上は」

「もうじき市長の記者会見だってよ。ラジオ、聞かなきゃな。リヒトとグエンも呼んでさ。テッセンはどうしてるかな。あいつ、蓬萊で、うまくやってるのかな」

「元気みたいだけどね——ひゅうが、ひゅうが！」

呼ぶと、ミサビの相棒である三毛猫が、赤いモスリンのリボンを翻して、窓からやってきた。

「なあにい、お二人さん。しけたツラねえ」

彼は、人間くさい動作で首をかしげると、前足で、湿った顔とひげをなでる。笑っているシルルをみると、ミサビにだけ分かる、かすかな表情の変化を見せた。そのまま、スフィックスのポーズで、机の上を陣取る。

「いいからさ。ねえ、テッセンから、なんか言ってきてない？」

「元気よ。アルリシャいわく」

「今日は？ テッセンなら、絶対、ペトルーシュカについて何か言ってると思うんだけど」

「今日はまだだわね。ねえ、ペと——ナントカ、って、そのせい？ 街じゅう、なんだかざわっとしてるのは」

「ああ。感じる？」

「ええ。なんだかねえ。魂の模様がめまぐるしいの。ヒトの形がおかしいの。人心惑うときは我らもまた——あんたたちと契約する時代になってから、私たちだって、ちょっとは変化してんのよ。お偉方も、久しぶりに集会に顔を出したし」

「ん？ 誰のこと」

「舶来の賓客がいらっしゃるのよう。でもこれは、あんたたちには関係ないわ」

あつさりと言って、ひゅうがは、パンのかけらを要求した。

「夏が来る前には梅雨があるものよねえ」

彼が、桃色の鼻先を向けた窓の外で、雨が降り始める。宵闇に銀糸が垂れ下がるように、行灯の明かりに雨は光る。

雨音は不規則だった。

ひゅうがは、尻尾を振りながら屏風の外へ出た。シルルがパンを食べ終わって、着替える、と言ったので、ミサビも、茶器を片付ける。続いて出ようとする、背後で「そういえば」とシルルが声をあげた。

「せっかくなのに、今年も出さないのか」

「――ああ」

自分のスペースへ入り込んだミサビは、足元に目をおとした。くずかごには、封を切られないままのインヴィテーション。

「いいんだ」

なぜか、声には微笑が混じった。シルルは「そう」と低く呟き、そのまま、どさりとベッドに倒れこんだらしい音がした。

「お前がいいなら、いいんだけど。――リヒトはつくづく、幸せだよ、な」

「そう？」

「そうだよ」

声に色があるとしたら、このシルルの声は透明だった。何の感情も無い。

嫉妬すら。

それが、妙にミサビの背筋をぞっとさせた。彼は、あわてて言う。「明日は、晴れるってさ――それで、ちゃんと太陽の光をあびて、ご飯を食べたら、シルル。元気になる。前向きに、考えることができるよ。大丈夫。明日、行くんでしょ。たたき起こすからね」

シルルは答えなかった。

ミサビは、くずかごからインヴィテーションを拾い上げ、それがなにか分からないほど、静かに、びりびりに引き裂いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5455y/>

ゲッター? 蓬莱幻想

2011年11月27日19時51分発行